個人史としての現代：政治・都市・地方自治研究を語る[*1]

A Scholarly Journey in Present Time:
Talking of Politics, City and Local Self-Government

話し手：加茂利男*
聞き手：新川敏光**、德久恭子***、加藤雅俊****

加藤） 本日はありがとうございます。立命館大学人文科学研究所の企画として、日本政治学会や地方自治学会の理事長を務められるなど、長年にわたり日本の政治学を牽引されてきた加茂利男先生の「政治学者としての個人史」を伺います。加茂先生、法政大学の新川敏光先生、立命館大学の德久恭子先生、そして立命館大学の加藤雅俊が参加しています。まず加茂先生から個人史についてお話いただき、質議応答を交えながらお話を深めていきたいと思います。それでは加茂先生、よろしくお願いします。

加茂） こういう機会をいただいてありがとうございます。8年前に大きな病気をして僕の人生は大きく変わってしまいました。命はとりとめたのですが、後遺症で体が不自由になり、認知機能もおかしくなったものか、記憶にブランクができました。そのため、もう研究をするのは無理だろうと思って、ほとんどの本や資料を処分してしまいました。記憶も記録もなくなってしまったので、社会や政治や学問についてオーラル・ヒストリーを語るのは、

＊大阪市立大学名誉教授
＊＊法政大学法学部教授
＊＊＊立命館大学法学部教授
＊＊＊＊立命館大学産業社会学部准教授

無理だと思っていました。しかし、今回みなさんに尻を叩かれて、残っている記録を手掛かりに、記憶を掘り起こす努力をしてみようかという気になりました。といってもさしあたり、この間の世の中の動きについての記憶はブランクだらけですので、このオーラル・ヒストリーは、頭の奥からパーソナル・ヒストリーを少しずつ引っ張りだし、それを辿りながらお話しするものになりそうです。ご容赦願います。

大阪市大の学生時代

加茂）　パーソナル・ヒストリーの入口として、まず私の学生時代のことをお話しします。私が大阪市立大学に入ったのは 1963 年、卒業が 67 年です。60 年安保と大学紛争にはさまれた、割合平穏な時期でした。とはいえ、その頃の大阪市大は、保守派の大阪市議会議員に「アカの大学」とか「左翼大学」と言われたくらい学生運動が盛んで、月に 1、2 度は自治会がチャーターしたデモ行きのバスが何台かキャンパスに横づけになり、ノンポリの学生も「せっかく市大に入学したんだから一度はデモにも行ってみよう」という感じでバスに乗り込んだものでした。私もそんな感じで学生運動に首を突っ込んでいったクチでした。とはいっても、遊び感覚だったわけではなく、警官隊に殴られたり、蹴られたりすることを覚悟しながら、デモへの参加を通じて何か社会を感じようとしていたように思います。高校時代に読んだ受験雑誌に、大阪市大はかつて恒藤恭、末川博、河田嗣郎などを擁したリベラルな大学と書いてあって、私はそれにひかれて市大に入ったので、政治や社会への関心は強かったと記憶します。当時、最大の争点はベトナム戦争でした。のちに「ペンタゴン・ペーパーズ」で真相が明らかになった「トンキン湾事件」をきっかけにアメリカの北爆が始まったのですが、これに対する反対運動が世界中で起こったわけです。私も当然、ベトナム反戦運動にはかなり熱心に参加し、学生集会で「トンキン湾事件」はアメリカのでっちあげだ、な

どと発言したのを覚えています。

市大を選んだもう一つの理由は、父がやっていた会社が倒産し、家が貧乏になったため、授業料が安く（当時は年間 9,000 円）、学生部のアルバイトあっせん機能が盛んだったこの大学に親近感をもったことです。別名「アルバイト大学」といわれた市大の福利厚生機能のおかげで、私は 4 年間、親の援助は全く受けずに学資・生活費を賄い、週 5 日はバイトで夜遅く帰宅するという日々を送りました。私は正真正銘の貧乏学生だったのですが、あの頃は一般に学生があまり遊ばないというか、遊べない、遊ぶにしても大学近辺の雀荘に入り浸るくらいだったというご時世でした。

そんな暮らしをしながら、講義にもある程度は出席していましたが、勉強らしいことをしたのはもっぱら電車の中でした。自宅があった和歌山市と大阪を結ぶ国鉄阪和線に乗っている時間が往復 2 時間。その間に法学部の科目の勉強もし、思想的な本も読みました。経済的、時間的なハンディキャップを自覚していたので、電車の中での勉強は結構真面目にやりました。一種のハングリー精神だったんでしょうね。法学部だったので、刑法や民法の教科書も読みましたが、カール・マルクス／フリードリヒ・エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』や、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（いわゆる『プロ倫』）も一回生のときに電車のなかで読みました。あの頃は、生協の書店に行ったら「マルクスとウェーバー」というようなタイトルの本がやたらに目について、マルクスとウェーバーの思想的な対立や重なりが、20 世紀の社会科学や思想のなかに流れる根本問題らしいことが察知できたのです。マルクスとウェーバーを読んだといっても、はじめはチンプンカンプンで、ちょっと引っかかったところやある程度分かった気がしたところに傍線を引き、書き込みをして、あとで確認していました。特にウェーバーを電車の中で読むというのは大変でした。ご承知のように、彼は読者に親切ではない学者で、言葉が難解なうえ、センテンスがやたらに長く、ダッシュやカッコでくくった挿入句がいっぱい入ってくる。

のちに『職業としての政治』をドイツ語で読んでみたら、ワンセンテンスが1ページ半続いた箇所を見つけました。

新川）　記憶に残ってます。

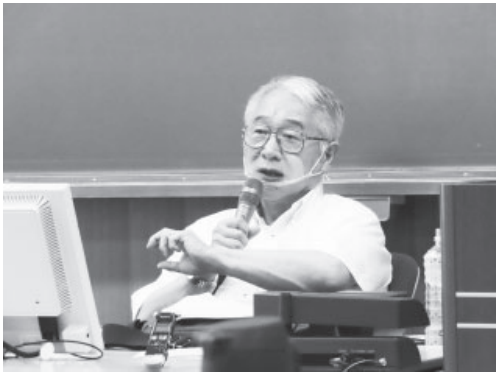
加茂）　本文と挿入句の関係を一つ一つ考えながら読んでいると、センテンス全体のつながりがわからなくなってしまうので、もう一度センテンスの頭から読み直す。一つ一つの言葉も難しいので、それも考えなくてはいけない。部分と全体を何度も往復しながら読みました。たぶんウェーバーは、一つの文章を書きながら、途中で思いついたことを挿入句やカッコにして放り込むという感じで、自分の思考過程をそのまま記述しているんだと思いました。初学者にとってはこんなに不親切な本はありません。傍線をいっぱい引き、書き込みをしながら、どうにか最後までたどり着き、何回か読みなおしているうちに、だんだんわかる部分が増えてくるのですが、そのたびに傍線を引きなおし、書き込みを増やしていくのです。私が読んだ『プロ倫』は河出書房の「世界の大思想」シリーズの中の『ウェーバー政治・社会論集』に収められたもので、『プロ倫』の部分は阿部行蔵さんの訳でした。現在もその本は残っていて、昭和38年8月という購入の日付が書いてあります。この年の8月には、一か月高野山で南海電鉄のアルバイトをしましたので、ちょっと高い本を買う余裕ができたんだと思います。とにかく、いろんな色の傍線や書込み、付箋が入っていて、読むのにすごく苦労していたことがわかります。1日たった2時間の通学時間が、私にとって貴重な勉学リソースだったことを改めて再認識します。

蛇足ですが、私の学生時代にはまだ出ていなかった内田義彦さんの『社会認識の歩み』（岩波新書）が1971年に出ました。そこに本の読み方について書いてあります。内田さんは、解説書などを読まないでまず原典（といっても翻訳でしょうが）を読め。わからないまでも、いくらかわかりそうな断片を自分の眼で読み取ることが重要だと言っていました。最初に断片、それからだんだんにその本の全体を理解していく。再解釈していく場合にも、ある

断片がものをいって、それをテコにして再解釈が可能になるというようなことを書いていました。これは、『プロ倫』を私が読んだときに無意識にやっていたことと重なっていて、妙に共感したのを覚えています。『ドイツ・イデオロギー』は、たしか古在由重訳の文庫版で読みましたが、残念ながらいつの間にかなくしてしまったようです。ウェーバーほどではありませんでしたが、やはり傍線だらけだったと記憶しています。

当時の大阪市大は、市議会で「アカの大学」というレッテルを貼られたくらいで、極左から穏健左翼まで、左翼のセクトが一通り揃っていて、それぞれが１年生や２年生をオルグするために、マルクスやレーニンを読む読書会をやっていました。私も２、３の読書会に引っ張り込まれましたが、いま思うとそういう会で、後の京浜安保共闘事件や日航機よど号ハイジャック事件の中心人物たちと一緒になっていました。誰かの下宿でレーニンの『国家と革命』なんかの読書会をやっていたのですが、要するに私は彼らにオルグされかかっていたわけで、ニアミスもいいところでした。

当時の大学生、特に大阪市大の学生はおしなべて懐がさびしく、あまり遊ぶ余裕がなかったため、金のかからない読書会や研究サークルが結構流行っていました。もちろんマルクスばかりでなく、ジャン・J・ルソーの『社会契約論』やルドルフ・フォン・イエーリングの『権利のための闘争』などは、ノンポリ層を含めて勉強好きな学生によく読まれていました。法学部では渡辺洋三さんの『法というものの考え方』（岩波新書）なんかが一番よく読まれていたという記憶があります。のちに都立大の学長になられた英米法の下山瑛二先生が当



時大阪市大におられたので、チューターをお願いしてルソーの『社会契約論』を読んだこともありました。遊ぶお金がなく、ゲームもスマホもなかった分、われわれは本を読むことで、心の飢えや渇きを満たしていたように思います。ちなみに、当時は生協食堂のきつねうどんが30円、スパゲティやカレーライスが40円で、だいたいそんなものを食べていたと思います。

政治学との出会い

加茂）　法学部に入ったので、司法試験を受けて法曹になる夢は私も持っていました。しかしその夢は割合早く断念しました。その理由の一つは、とにかく貧乏で自分の学資を賄うだけでなく、家の家計を補うためにもアルバイトをする必要があったので、いわゆる「六法族」のように日がな一日、図書館で六法科目を勉強するような余裕がなかったことです。もう一つの理由は教養課程で聴いた政治学の講義が面白かったことです。一般教育科目の政治学は当時立命館大学におられた山口定先生が非常勤で講義しておられ、それを聞いたのですが、これが私には面白かった。アメリカ政治学も含めてバランスのとれた講義にしようと工夫しておられたようですが、やはり先生のテーマであったファシズムの話は聞き応えがありました。とくに、フランツ・ノイマン、ジグムント・ノイマン、カール・マンハイム、エーリッヒ・フロムなどフランクフルト学派周辺の人たちに関する話が興味津々で「政治学はスリリングだな」と思いました。こういう理由が重なって、私の関心は政治学に移っていったわけです。

日本の政治学で私が最初に読んだ本は、ご多分に漏れず丸山眞男さんの『現代政治の思想と行動』（未来社）でした。山口先生がことあるごとに言及された本だったからです。「超国家主義の論理と心理」とか「軍国支配者の精神形態」とかを読んでハマってしまった。現在でも当時買った未来社のハードカバーの本があります。

新川）　最初は2巻本だったのが後からまとめて1冊になったものですね。

加茂）　ああそうでしたね。超国家主義の論理とか、思想の構造やパターンのようなものから軍国主義やファシズムを説明するやり方が、スリリングで面白かったわけです。丸山先生はのちに、「戦後は政治学者が少なかったので、自分も政治学のかなり広範囲の問題について書いたが、あれは言ってみれば夜店を出していたようなもので、本店はあくまで日本政治思想史で、最後は本店に帰っていったんだ」というようなことを言っておられます（丸山「歴史・古層・執拗低音」武田清子編『日本文化の隠れた形』）が、私はその「夜店」にシビれていたわけです。

そんなわけで、2回生になった頃には政治学のゼミに行こうと決めていました。就職の方は高校の社会科の先生になろうと思い、教職科目も履修しました。

当時、大阪市大の商・経・法学部の学生は、旧制商科大学だった縁で、一橋大、神戸大と「三大学ゼミ」とか「三商大ゼミ」と呼んでいた討論会を毎年各大学持ち回りでやっていました。テーマを決めて各大学のゼミが報告し、討論し合うゼミでした。政治学をやろうと決めていた私は、2回生の時に、3、4回生の政治学ゼミの人たちにくっついて、神戸大で行われた三大学ゼミに参加しました。そのときの論題が、「大衆社会論をどう考えるか」でした。それまで「大衆社会論」なんかほとんど知らなかったのですが、山口先生が政治学の講義で、ジグムント・ノイマンの『大衆国家と独裁』のことを話されていたのを思い出して、「あの手の話か」と思って参加しました。いわゆる「大衆社会論争」の発端になった松下圭一さんの論文はまだ読んでいませんでしたが、この時のゼミを通じて「大衆社会論」なるものに触れ、当時、大阪市大法学部の学生が学部の補助を受けて出していた『学生法学』という雑誌に「大衆社会とファシズム」という論文を寄稿しました。夏休みを使って書いた400字50枚ほどの文章でしたが、今考えればこれが政治学に入っていくきっかけになりました。

3回生でゼミを選ぶ時、私は吉富重夫先生のゼミを選択しました。吉富先生は政治学原論の講義をしておられたので、正面から政治学をやるにはちょうど良いと思ったのです。白髪で風格があり、講義の時はチョーク一本と何かメモが入っていそうなB5版くらいの封筒だけを持ってこられるのですが、メモは全然見ないで、そらんじているようによどみなく講義され、毎回ぴったり前回終わったところから話をはじめられた。その異能ぶりには驚嘆させられました。吉富ゼミの方は左翼学生の吹き溜まりみたいでしたが、先生はそういう学生たちの頭でっかちな報告を、目を閉じて聞いておられました。ときにいびきも聞こえてくるのですが、報告が終わるとパっと目を開いて的確なコメントをされた。鼻っ柱の強い左翼学生の報告に調子を合せて議論を進めていたわけで、懐の深い先生でした。

吉富ゼミで放し飼いにされたような2年を送った感じでしたが、卒業が近づいた頃、トイレで吉富先生と出会いました。いきなり「加茂君、いま法学部の助手の公募が出てるだろ。応募する気はないのか」と言われて面喰らいました。「いやそんなことはまったく考えてませんでした」と言ったら、「考えてみたらどうだ」とだけ言って研究室へ帰って行かれた。私はすでに愛知県の教員採用試験に受かっていましたので、「先生、本気であんなことを言ったのかな」と困惑してしまいました。後日、生協の床屋で順番待ちをしているときに、政治学史の山崎時彦先生がやってこられて、「加茂君、吉富さんから何か話はなかったか」と言われました。「助手のことですか。どの程度確かな話か分からないので戸惑ってます」と言ったら、「採用される可能性は十分ある。ただし、学部卒で採用される助手というのは、任期付きで、2年以内にいい論文が書けなかったらお払い箱だから、高校の先生になるほうがいいかもしれんよ」と解説してくださったので、やっと学部助手の意味がわかりました。迷いましたが、少なくとも2年、給料をもらって勉強できるんだからと思って、法学部の事務室に応募の手続きをとりました。やがてあっさり採用がきまり、慌てて愛知県の教育委員会にお詫びと採用辞退の連

絡をしたという次第でした。トイレで「就活」した形になり、自分でも笑えました（笑）。

助手になってみたら、ウェーバーが『職業としての学問』で述べているように、これは学問における一種の徒弟奉公だったわけで、そこから本当の職業としての研究者になれるかどうかは、僥倖、運次第だったわけです。それから1年半、大部屋で他の助手や大学院生と一緒に朝から夕刻まで勉強しました。助手は学部の雑用もしなければいけなかったので、試験の監督とか学会、研究会の雑用を何人かの先生に命じられてやりました。ちょうど吉富先生が日本行政学会の理事長をしておられ、行政学会の大会を市大で開催されたので、その準備や当日の雑務一切を私が請け負い、他の助手の人たちに手伝ってもらってやりました。山崎先生には先生が幹事をしておられた「政治思想研究会」という会の事務局仕事を頼まれ、毎月一度会員に案内状を出したり、研究会当日のお茶の準備をしたり、諸々の雑用をやりました。こういった雑用はもちろん楽しくはなかったのですが、足立忠夫、山川雄巳といった、名前だけしか知らなかったエラい先生たちがメンバーで、そういう人たちと面識を得る機会にもなりました。

研究については、吉富先生は放任主義で、助手になった直後研究室に呼ばれて「やりたいことをやったらいい。相談に乗れることがあったら乗るよ」とだけ言われました。それが研究指導だったわけで、後にも先にも研究相談らしいことをしてもらったのはこの一回だけでした。「政治システム論をやってみたいのですが」と言ったら、先生は「そうか。システム論をやってみるか」とかなり乗り気そうな反応をされました。実はたしかその前の年、吉富先生は世界政治学会（IPSA）の大会に行ってデイヴィッド・イーストンの政治システム論の報告を聞かれ、ゼミでその話をされたことがあります。インプット、アウトプット、フィードバックという例の図を書いて「アメリカの政治学は、サイバネティックスみたいな、自己制御系のモデルで政治や社会のことを説明していく方向に行っているみたいだ」と言われたのです。

ゼミ生たちは半分チンプンカンプンで、キョトンとして聞いていましたが、私はうっすらと日本の政治学がアメリカ化しているらしいという感じを持ちました。それまでは、山口先生から聞いたドイツ流の政治学や社会学の考え方に強い影響を受けていたんですが、アメリカ政治学が影響力を広げているなかで、こういう新しい理論が出ているのだとすれば、これから政治学を始める者としては、なんとかそれを追っかけていかないといけないんじゃないか、という気持ちがあって言ったことですが、それが吉富先生の意に適ったようで、「とりあえずこれを読んでみなさい」と言って、イーストンの本を何冊か貸していただきました。分厚い英語の本を詳しくノートをとって読みましたが、慣れてくると読むのが早くなり、比較政治学や政治行動論の本も読みました。朝から夕刻まで研究室で政治学の本を読む日々でした。

同時に、法学部の研究者は第二外国語としてドイツ語をやるのがたしなみでしたので、ドイツ語文献の読書会にも出ました。助手・院生が集まって、比較憲法学の栗城壽夫先生をチューターに、ヘルマン・ヘラーの『アルゲマイネ・シュターツ・レーレ』などを読んだのを覚えています。これも徒弟修業の一環でした。

半面、私は学生運動をやっていたこともあって、マルクス・ボーイでしたので、マルクス主義の政治学者によしみを得たいと思い、当時論壇でも活躍しておられた明治大学の田口冨久治先生に手紙を出して、機会があったらいろいろ教えていただきたいと頼んだのですが、日ならずして返事が来、今度の政治学会の時に会おうということになりました。1967 年の 10 月、中央大学で行われた日本政治学会の大会に出て、会場で田口先生に会ったのですが、波長が合ったのか、その日は先生のご自宅に泊めていただきました。談論風発でグイグイとビールを飲みながら、次から次へ私が知らなかった話をしていただき、すっかり圧倒されてしまいました。田口先生は、私の第二の師匠のような存在でした。

こうして私の研究生活は順調に進んだのですが、2 年間という助手任期が

終わる以前に私の学問的修業期間が突如絶ち切られました。大学紛争が起こったからです。1968年のフランス「五月革命」の余波を受けて、日本でも東大紛争が起こり、それが多くの大学に波及しました。68年から69年にかけて、詳しい経緯は忘れましたが、大阪市大でも全共闘などが生まれて、学長や教授会を大衆団交で追及し、学舎・キャンパスを封鎖したため、授業はできなくなりました。たしか火元になったのは医学部で、「医共闘」が「完全事前合意」、つまり大学の管理運営に関するすべての事項に学生が参加し、合意しなければならないというルールを作るよう要求していたように思います。フランスでの「参加」「異議申し立て」の思想の影響でした。しかし、次第に具体的な改革要求は雲散霧消してしまい、全共闘が前に出て、特権身分のようだった教授たちを追及して自己批判させ、大学の機能を壊してしまうことが、自己目的になっていったように思います。具体的にどう大学を変えようというのかがわからなくなって「大学解体」という破壊的なスローガンが飛び交いました。法学部も大衆団交の末、封鎖されました。私たちは研究室や事務室などの居場所を失い、本も読めなくなって、研究は中断しました。大学そのものがどうなるかわからない状態だったので、助手論文の執筆などする気にもなれず、私たち法学部助手は、全共闘と教授会のあいだにあってどういう立場に立つべきかを議論し、「法学部助手会声明」なるものを発表しました。起草したのは私でした。いま考えればわれわれも、紛争の熱に浮かされていたのかもしれません。

「声明」の趣旨は、大学は資本主義の「労働力生産工場」といえば言えなくもないが、郵便ポストや道路と同じようにどんな体制の下でも必要な公共財でもあるので、それを解体するというのは暴論であり、また大学の管理運営事項をすべて学生との完全な事前合意で決めるなどというのは非現実的な妄想だというもので、これを大学の正門脇に張り出したのです。おかげで法学部助手会は「日共・民青」だというレッテルを貼られてしまいました。でもこの声明文が破られたりすることはなく、紛争の初期は、言論空間は

オープンだったのだと思います。

7、8か月続いた封鎖は69年秋に解除され、大学は授業の再開へと向かいましたが、市大の場合、授業がすぐ正常に行われたわけではありませんでした。旧全共闘の授業妨害に対して教員が授業を守るガードマンみたいな仕事が続きました。

封鎖解除で全共闘は崩壊し、諸セクトは過激化しながら分裂していきました。そのなかから、赤軍派や京浜安保共闘のようなグループが現れ、自滅の道をたどったのです。一時友人だった人たちもそのなかにいましたが、そのことに思いを致す余裕はありませんでした。市大の紛争は、全共闘の崩壊では終わらず、あとに「黒ヘル」などというノンセクト・ラディカルが登場して、数年間キャンパスを跋扈し、革マルや中核も入ってきて7人も死人が出る内ゲバ・暴力事件が起こるなど、他の大学に比べて本当に静かになるまで長い時間を要し、ガードマン業務も長く続きました。

「職業としての学問」へ

加茂） 1969年秋、大阪府警による封鎖解除が行われ、研究室への出入りができるようになりました。たくさんの本が床に散乱していました。私はアルバイトの学生に手伝ってもらって自分の研究室と吉富研究室の図書の整理をする一方、助手の任期が終わるまでに論文を提出しないといけないと思って、「『システム史観』の形成とその問題性」という文章を書き、法学部の紀要『法学雑誌』に発表しました。いまからみれば我流で稚拙な論文でしたが、要するに政治システム論は、社会現象を自己制御系としての「システム」に擬して説明する理論であり、社会科学諸分野の対象や方法の固有性とか、社会事象がもつ歴史性のようなものを見失っているのではないか、という私なりのシステム論批判を書いたのです。これは学生時代にウェーバーやマルクスを読んでいた私のなかの「歴史主義」の表明でもありました。学生時代に

はカール・ポパーの『歴史主義の貧困』も読んでいましたが、私自身は歴史主義の方に親近感があったようです。

この論文は当時の政治学スタッフのなかでは一応評価されたようで、当時学部長だった山崎先生から「君は市大に残ってもらうが、助教授昇進は、ちょっと待ってほしい。そのあいだにどこかへ内地留学でもしてみてはどうか」と言われました。1970年の秋から冬にかけて半年の内地留学を認められたのです。どこに行こうか、と思って第二の師匠、田口先生に相談したところ、名古屋大学の東洋政治思想史の守本順一郎さんのところが良いと言われました。守本先生のお名前も、業績も知らなかった私は戸惑いながらも、そうすることにし、田口先生に斡旋をお願いしたところ、受け入れ承諾の返事が来たので70年10月から名古屋大学法学部に内地留学することになりました。名古屋では本山の小さな下宿に身の回りの品だけを持っていって暮らしました。近くの大衆食堂で昼飯を食べていたら、テレビで札幌五輪のジャンプ種目で日本選手が金銀銅メダルを独占した場面が放映されていたのを覚えています。

何の予備知識もなく門を叩いたのは失礼極まりなかったのですが、「守本シューレ」は知る人ぞ知る政治思想史の強固なグループで、研究室を訪ねたら、岩間一雄、雀部幸隆、山田公平さんなどが居流れて、白髪で恰幅のよい守本先生が中央におられました。

守本先生は、その後NHK教育テレビの日本思想史に関する対談・鼎談シリーズを企画し、自ら司会をされたことでもわかるように、代表的な日本思想史研究者だったわけです。守本シューレの面々は、大阪から来たアメリカ政治学をやってる若いやつというので珍しがって可愛がるような、いたぶるような雰囲気で接してくれました。後に東北大学にいった高城和義さんが私の世話係で、下宿探しから、学内の案内までなにかと面倒をみてくれました。高城さんは後にパーソンズの研究で第一人者になりましたが、私の方はパーソンズ研究から早々に離れてしまい、高城さんが次々に発表するパーソンズ

研究の成果を遠くから眺めていただけでした。

守本シューレは、毎年夏に戸隠で合宿研究会をやっており、私も何度か参加させてもらいました。これはまさに修験道の聖地戸隠にふさわしい修練の場でした。各人が自分の研究を報告するのですが、たいてい途中で守本先生から待ったがかかって質問される。追及されて答えられなくなるとそこで終わりで、最後まで聞いてもらえないことが多いのです。私も3度ほど報告しました。私の場合は生粋の守本シューレではなかったこともあってか、あまり手荒くは扱われませんでしたが、いずれにしても厳しい修練の場で、戸隠合宿に行く前はずいぶん緊張しました。守本先生やその一門の人たちは、第三の、しかも私に「研究とはどういうことか」を実地に教えてくれた師であり、先達でした。半面、戸隠合宿はメンバーの人間的なつながりをつくる場でもあり、鬼女伝説が伝わる戸隠山や鬼無里をめぐるハイキングをやったり、手打ちの戸隠そばに舌鼓を打ったりしたりしたものです。

大阪市大政治学部門の再出発

加茂） 1970年頃は、多くの大学で多くの教員が大学紛争で疲れ傷つき、居場所を変えたいと思う気持ちになったようで、教員の異動が激しくなりました。市大の政治学でも二人の先生が去り、増員を含めて、4人の先生が赴任されました。転入された先生のなかに、教養課程で政治学をならった山口定先生がおられたのは私にとっては喜ぶべきことでした。また、その後私と長くコンビを組んだ行政学の水口憲人氏がいたことも銘記すべきことでした。吉富先生が政治学原論と行政学を兼担しておられたのを、政治学は私、行政学は水口氏という形で分担することになったのです。紛争後の改革で、助教授や助手も教授会メンバーに加えられることになり、助手の私も教授会に出ることになって、最初に携わった教員採用人事が水口さんの採用案件でした。たしか「民主主義社会の行政学」というようなタイトルで、アメリカの

官職交代制、スポイルズ・システムを研究した論文が審査の対象でした。紛争後の異動の結果、大阪市大の政治学は、山崎時彦先生を筆頭に欧州政治史の山口定、日本政治史の毛利敏彦、国際政治の平井友義先生、水口、私の6人体制になりました。山崎先生が退職された後には小笠原弘親さんが来られるのですが、これはしばらく後のことです。

山崎先生はそれまでともすれば割拠的だった政治学ファッハをまとめようと苦心され、みんなで旅行したり、頻繁に政治学研究会を開いたりしましたので、スタッフ同士の親密度は高まりました。野尻湖の山崎先生の山荘に泊まって、野尻湖一周のサイクリングをしたりしました。また当時は、政治学者や法学者のなかに野球好きが多く、関西では神戸大、同志社大、阪大と大阪市大の法学部教員で4大学リーグ戦を毎年春と秋にやっていました。政治学の研究者の間でも毎年日本政治学会の大会の前日に東西対抗野球をやっていました。東のリーダーは石田雄先生で、山崎先生との共催みたいな形でやっていたのです。山崎先生は野球が好きなだけでなく、けっこう勝負にこだわるタチで、いい加減な態度で野球をやることを許してくれない。試合が近づくとわれわれ助手は、バックネットの前に並ばされて山崎先生から百本ノックを受けました（笑）。いい加減なプレーをすると本気で怒られました。政治学の東西対抗では、西軍に五百旗頭真、小笠原弘親という二人の強力なピッチャーがいたので、たいてい西軍有利でした。東軍で覚えているのは東大の有賀弘、北大の古矢旬さんや田口晃さんらでした。1980年ごろでしたか、北九州大学で学会が開かれました。私と水口さんは事情があって学会に出られないことになったのですが、山崎先生から「前日の野球には来い」（笑）と命令され、二人でグラブと金属バットをもって新幹線に乗って小倉まで行きました（笑）。野球が終わったら、打ち上げに付き合ってそのまま大阪へ帰ってきました。「俺たちは何をしてるんだろうな」と二人で苦笑し合ったものです。

日本政治学会へのデビュー

加茂)　学問の方に話を戻しますと、1970年度の日本政治学会で私は初めて共通論題の壇上に上がりました。テーマは「政治学の方法」、報告者は関寛治、田口冨久治、もう一人は確か内山秀夫さんではなかったかと思います。私は、アメリカ政治学は機能主義に傾いて、ウェーバーが指摘した「歴史的個性」のような問題が等閑視されているのではないか、それで良いものだろうか、というようなことを言ったつもりでした。新カント派のハインリッヒ・リッカートが言った「法則定立的な学問と個性記述的な学問」というのは、どっちかに割り切って考えられるものではなく、それこそウェーバーが苦労してどうつなぐかを考えた問題でしたので、そのあたりを「方法」の問題としてどう考えたらいいのだろうか、と言ったつもりだったのですが、どの程度うまく伝えられたかよくわかりません。

ともあれこれが私の学会初お目見え、25歳の時でした。

助手論文を書いた後、出版社から雑誌などへ論文の寄稿を求められたりするようになり、とくに青木書店が刊行し始めた『現代と思想』に何本かの論文を書きました。これも田口先生の口添えによるものだったと承知しています。先生はどうしてだか、私と当時横浜市立大学にいた佐々木一郎さんに目をかけられ、3人でマルクス主義政治学の教科書を書こうと提案されました。その成果が『政治の科学』(あゆみ出版社、1972年。その後、青木書店から、1974年に再出版)でした。いま読むととても教科書としては使えないものでしたが、当時はマルクス主義ブームで田口さんはスターでしたので、あの本で私の名を知ってくれたという人によく出会い、赤面しました。

助手論文を整形したものを1970年に『現代と思想』の2号に掲載したことで、私のことを知ってくれた人も多かったようです。システム論を出発点とした私の政治学の研究は、結局タルコット・パーソンズ研究に行きつきました。1974年に出た日本政治学会の『年報政治学』に「二〇世紀デモクラ

シーの思想的位相」というパーソンズのファシズム論を扱った論文を書きました。パーソンズが戦前に書いた『社会行為の構造』は、マルクス、ウェーバー以来久しぶりに読んだ読み応えのある労作でした。彼はトマス・ホッブズが『レヴァイアサン』で提起した「社会の秩序はどうして担保されるのか」という問題を出発点に、ジョン・ロック、アダム・スミス、マルクス、エミール・デュルケーム、ウェーバーなどがこの「秩序」の問題をどう解こうとしたかをあと付け、ウェーバーが一番いい線まで行ったけれど、結局誰も的確な答えを出せなかった。その結果がファシズムであり、この問題を解決するにはマルクスでもウェーバーでもだめで、新世界アメリカに生まれたプラグマティックで機能主義的な考え方が必要だとして、こういう思考を成熟させたアメリカこそ「新しい主導社会」だという結論へもっていったもののように理解できました。人間社会には、多様・異質な利益や価値が常に併存しているが、それらは必ずしも対立するものではない。ウェーバーは合理性と非合理性を分け、歴史のなかに働く合理化の作用によって、社会はどんどん合理化していくが、すべてが合理化すると機械のような外枠ができてしまう。その結果、人間が持っている理念とか心情とかが働く余地がなくなる。『プロ倫』の最後の部分でウェーバーが言った魂や情熱のない「化石化」された人間たちの世界がやってくるというわけです。それはアーサー・ミッツマンがいった『鉄の檻』（アイアン・ケージ）であり、チャップリンの『モダン・タイムス』が戯画化して描いた世界でもありました。しかし人間が人間である限り、情熱や理念を捨て去ることはできないので、化石化・システム化された世界に反逆する動きも出てくる。それがファシズムだというのが、パーソンズのファシズム論の趣旨だったと思います。そうならないためには、多様で異質なものを併存させ、架橋するような価値体系をつくる必要がある。合理性と非合理性は交わらないと考えず、併存し両立することもあると考える。言い換えれば、価値はいろんな要素に分解できるのであって、分解した価値要素をつなぎ合わせることで異なる価値を通約することも可

能だと考えるわけです。無数の移民グループと先住民や黒人でつくられたアメリカという社会は、そういう価値の通約・妥協を積み重ねることで、多元的な民主主義をつくってきたのだというわけです。ジョン・デューイやアーサー・ベントレー、ロバート・ダールなどの多元的民主主義論などは、そういうアメリカ社会の姿を体現した政治理論だということだったのかもしれません。第二次大戦後には、ダニエル・ブーアスティン、ルイス・ハーツなどの「コンセンサス史学」、ダニエル・ベルの「イデオロギーの終焉」論などの思想や理論の影響力が世界を席巻していったわけですが、パーソンズはその走りをつくった学者だったのではないかと思いました。余計なことを言えば、差別・分断主義が広がる最近のアメリカの様相は、この国のピークがいよいよ終わろうとしていることを物語っているようにも思えます。

「二〇世紀デモクラシーの思想的位相」を考えようとした私のモチーフは、普遍性を標榜するアメリカ社会科学にもついて回る歴史性をあぶりだすことにあったとも言えます。この論文を見て日本評論社が私に単著の出版を打診してくれ、70年代前半に書いたほかの論文と合わせて、『現代政治の思想像』を出版しました。1975年2月22日、私とカミさんの結婚式の日の未明に「あとがき」を書いて原稿を出版社に送ったのを覚えています。睡眠不足でうっかり結婚指輪をクロークに預けてしまい、いざ指輪交換という段になって慌ててこのプログラムを飛ばしてもらいました（笑)。

加藤）　ありがとうございます。いままでお話しただいたのは、加茂先生が20代の頃のお話になると思います。大学を卒業され、助手として政治学の世界に入り、助手論文を書き上げて単著を出版される辺りまで、となります。質疑応答をお願いします。

新川）　大変興味深く伺いました。僕とは一回り年が違うんですが、結構かぶるというか重なる部分もあって。札幌オリンピックの時は中学3年で見ていました。苦学生であったということですが、当時先生は家庭教師とかはさ

れなかったんですか？

加茂） 家庭教師も、季節労働、日雇い労働もやりました。

新川） 60年安保があって全学連がだめになって全共闘が出てくるまでの間ということで、この間の学生運動は反戦平和、ベトナム反戦運動が中心でしたか？

加茂） 大学管理法闘争、それから日韓条約反対運動というのもありました。現在、韓国から徴用工問題とか慰安婦問題が出てきていますが、あれに通じる話です。日韓基本条約は1965年でしたが、あの頃僕らはあれをベトナム戦争と重ねて捉えてました。65年に日韓基本条約が締結されたのは、アメリカがベトナム戦争で泥沼に入っていて、ベトナムが共産主義になったら、「ドミノ」式にアジアが共産化するという危機感から、日本と韓国に平和条約を結ばせてアメリカとの同盟関係をつくろうとしているんだという見方をしたわけです。日韓の戦後処理がちゃんと済んでいないのに、ベトナム戦争のために、無理やり国交を結ばせているんだという見方に立って、日韓基本条約反対の運動をやった。いま日韓の歴史的な問題は解決していないんだという韓国サイドの感覚が、国際法上の関係としては解決済みだという日本サイドの感覚とズレてしまったのは、ここに原因があるんだという思いが、僕なんかには残ってます。これはやはり戦後日本史の大きな忘れ物じゃないかと思っています。

新川） 先生のその頃のお立場とは？実際に一緒にやってた方とは？

加茂） あの頃、一時政治空間がまだいくらかオープンで過激派とも付き合ってた時代。僕は「日共・民青」と言われていましたけど、イタリア流の構造改革派の連中とも仲が良く、田宮高麿とか森恒夫だとかともある時までは付き合ってました。途中で喧嘩別れしましたけど。

新川） ウェーバー、マルクスとか、内田さんなどは、僕も追っかけて読んだ記憶がありますが、先生はその他に、当時だと吉本隆明とか大学から離れたところにいた人たちの流れはどう見ておられましたか？

加茂）　吉本隆明や埴谷雄高なども、ちょっとのぞきましたが、あまり深入りしなかった。むしろサルトルなんかに興味があって『弁証法的理性批判』なんかを読んだ。サルトルはマルクスに近かったので、親近感があったんだと思います。

加藤）　先生の学生運動との距離感の話が面白かったのですが、運動にのめりこんでいかなかったとのことですが、何か歯止めになるものがあったのでしょうか？

加茂）　結局日和見主義だったんでしょうね。常に後戻りできる余地を残していた気がします。

新川）　それはひょっとしてお父さんの会社が倒産して家計を助けないといけないという家族に対する責任感があったんでしょうか？

加茂）　責任感というほどのものはなかったんだと思いますが、父も若い頃、労働運動をやっていたので、父にある程度感化された。その父が零落してしまったことに対して慙愧の思いがありました。ですから父の会社が倒産した時に、大学をやめて働くかという選択肢もあったんですが、その決断はできなかった。すでに高度成長が始まっていて、学生でも働いて自活できる環境があったこともあって、時々家計の助けができれば良いということになったんですね。

加藤）　先生には「研究者になりたい」という意識があったのでしょうか？高校の先生になるというお考えがあったとお聞きしましたが、学部生の頃はどのあたりに将来の目標があったのでしょうか？

加茂）　研究者になるという意識はありませんでした。山口先生の影響もあって、卒業して社会に出たらとたんに本を読まないサラリーマンになってしまうのではなく、なにか社会や政治に対する問題意識をもって生きることを考えていたので、高校の先生くらいかなと思ったのです。

新川）　学部助手というのは成績が良かったんだと思いますが、失礼ですが成績は？

加茂）　自慢の種になることは密かに覚えているもので、卒業成績は平均87点くらいで、一応学部でトップでした。あいつ学生運動はサボってたんじゃないかと思われるんじゃないかと思いました。

新川）　すごいですね。吉富先生というのはどういう方だったんですか？

加茂）　それがよくわからない。すごく頭の良い先生だったのは間違いないのですが、戦前から政治機構論などの本や教科書的なものをいっぱい書いていましたが、私が読んだのは大阪市大の法学叢書で出された『政治的統一の理論』という本などでした。正直言ってよくわからなかった。ゲオルク・ジンメルとかロバート・マッキーバーとか、政治社会学の文献をベースに政治における「統一」について書いておられるのですが、いまみたいに引用注や脚注をきっちりつける作法が確立していなかったものか、どこまでがジンメルの考えで、どこからが先生の考えなのかがよくわからない。いまの基準からすると評価が難しいのです。そういう意味で学問的な評価ははっきりとできなかった。われわれと付き合ってくれた頃は、もう第一次臨時行政調査会など、国や地方の審議会の仕事をメインにしておられましたので、われわれとは別世界の人でした。学問的に大きな影響を受けたという感覚はありません。

新川）　田口先生とは？

加茂）　とにかくカッコよかったのです。『エコノミスト』などに政治評論を書いていまして、学会での発言も颯爽としてました。ただ付き合っているあいだに、僕は田口さんのようにストレートなマルクス派ではないな、と思うようにもなりました。守本先生の影響もあって、僕は歴史的・内在的に思想や理論をみるようになっていて、田口さんの議論はちょっとストレートすぎると感じるようになっていった。マルクスも相対化してみてみる。その時にウェーバーが役に立つ、という複眼的な発想が出てきたのです。60年代ですから、左と右が正面からぶつかり合ってた時代です。その時期に僕は少し屈折していったんです。

加藤）　学生時代に読まれた本で印象に残っているものはありますか？

加茂）　グラムシの『愛と思想と人間と』が好きでよく読みました。柴田翔の『されど我らが日々』も自分に重なるところがある気がして読みました。

新川）　倉橋由美子の『パルタイ』の時代ですね。

加茂）　世俗的には『愛と死を見つめて』なんかが歌や映画にもなって涙を誘ってた（笑）。

加藤）　マルクスとウェーバーに影響を受けつつ、研究テーマは吉富先生と相談して「政治システム論」をやろうと考えられたということですが、マルクスそのものをやってみようということにはならなかったんですか？

加茂）　僕はストレートじゃなくて、たえず相対化し屈折するんですね。

加藤）　政治学がアメリカナイズされていくので、その最先端を見てみようと考えられてシステム論をやられたとのことですが、実際にやってみたときの感想はいかがでしたか？

加茂）　システム論自体は「モデル」ですよね。たんなるアナロジーとも言えるわけですが、モデルを使うことでよく見えてくるものもある。発見的な機能があった。そういう意味でシステムというモデルを使ってみる意味はあると思いました。

新川）　マルクス、ウェーバーの話は出ましたが、レーニンはいかがでしたか？

加茂）　レーニンもある程度読みましたよ。『国家と革命』とか『帝国主義論』はもちろんですが、初期のナロードニキ批判、『人民の友とは何か』なんかも興味があった。ロシアにおける資本主義の発展については、マルクスは必ずしも必然的じゃなくて、農民の共同体を基礎に社会主義をつくれる可能性があるという考え方だったみたいですが、レーニンはロシアにも資本主義が育っていて、そのなかから社会主義が出てくるという見方だったようですね。僕はその点ではマルクスのほうが夢があって好きだった。いまとなってはあまり意味のない議論ですが。

新川）　先生の学問のなかには、レーニン主義的な傾向があまりない。全共闘をくぐった人たちはそういう傾向が結構感じられるんですが。

加茂）　レーニンの政治論文『何をなすべきか』なども一応読んでいて、情勢分析とか戦略・戦術かの議論はシャープだなと思って感心しましたよ。

新川）　面白いのは、アメリカ政治学を勉強する過程で、先生がマルクス主義というか田口先生から距離をとっていったように見えることです。『政治の科学』なんかの先生の論調は田口先生とずいぶん違うように見える。

加茂）　その頃はもう守本順一郎さんの影響を受けてましたから。

新川）　なるほど。

加藤）　山口定先生との出会いが大きかったとのことですが、どのような内容の授業をされていたのですか？

加茂）　テキストは猪木正道さんの『政治学新講』で、その本を使ってオーソドックスでバランスの取れた政治学の授業をしようとされてた。ハロルド・ラスウエルの『権力とパーソナリティ』なんかを使って行動論的な政治学の議論も紹介されたりしてました。でも聴いてて面白かったのは、やはりファシズム論関係の話。エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』なんかの話は僕にとっては衝撃的でした。

加藤）　私は名古屋大学の卒業生ですが、世代が異なることもあり、守本先生のことはよく存じ上げておりません。どのような研究をされていたのでしょうか？

加茂）『東洋政治思想史研究』（未来社）で朱子学を、『日本思想史の課題と方法』（新日本出版社）で『記紀』から林羅山にいたる日本思想史の歴史的展開を研究された。僕とは畑違いの先生でしたが、マルクスとウェーバーをベースにしながら思想の歩みを分析する研究をされていて、研究対象は違ってもその方法が刺激的でした。学問的に影響を受けたという点では宮本憲一先生と並んで守本先生から得たものが大きい。

新川）　名古屋大に内地留学された時の身分は？

加茂）　市大の助手です。ルールからいうと論文が合格なら25歳で助教授になれたはずなんですが、空きポストの問題とかごたごたして、結局助教授になれたのは、27歳の時でした。

加藤）　助手時代の大学紛争に関して質問があります。加茂先生からすると、助手という立場であることもあり、大学側の論理や主張もわかる、他方で、それまでの経緯もあり、学生運動側の主張もわかる。助手として、両方に挟まれるご苦労はいかがでしたか？

加茂）　事の経緯は今となってはよくわからない。争点は霧散霧消してしまっていますが、一つは教授とか教授会が大衆団交が始まると、僕らが考えていたより「だらしがない」という感じがありました。教授が大衆団交で学生の前で自己批判する。これまでの大学の仕組みとか身分職階制は、存在理由や根拠があってできていたはずだったのに、みるみる音を立てて崩れていくわけですね。それを見ていて情けなかった思いがありました。でも全共闘の主張も無茶苦茶で、あの頃はそういうのは「妄想だとか、非現実的だ」と言いにくかった時代だけど、頭を冷やして考えてみれば、ありえないようなことを学生たちは要求して、それが聞かれないと封鎖して大学の機能を止めるというヴァンダリズムで破壊的だという感じがしたので、これに与するわけにいかん。何の力もなかったけど、自分たちの気持ちの中では「第三の道」を考えざるをえないという気がして、法学部の助手だけで議論をして考え方をまとめて壁新聞のようなものにしたわけですね。その意味ではジレンマというか、どっちにも与するわけにいかない、だけど、どっちも丸ごと否定はできなかった。無茶なこともやりましたよ。全共闘が、助教授とか講師とか教授会に入ってない教員たちを集めてつるし上げていた時、われわれが、見るに堪えないと思ってあえて壇上に出て行って、ヤジと怒号のなかで発言したこともありました。とにかくわれわれは「第三の道」があるのではないかという考え方でしたね。

加藤）　もう一つ質問があります。加茂先生の助手論文である「政治システ

ム論批判」は、「システム論」をウェーバーのモチーフで再構築したとも読めますし、パーソンズ批判として『年報政治学』に寄稿された論文も、パーソンズをウェーバー的に再解釈すると加茂先生のような読みになるとも思います。加茂先生のなかで、学問観や知的なものの見方とか、ご自身の研究の基礎を構築する上で最も影響を受けた人は、ウェーバーになるんでしょうか？

加茂） そうだったかもしれない。結局、僕は、あっちいき、こっちいき、彷徨っていたんですね。最初はマルクス一本でいけると思っていたが、どうも怪しいと思うようになって、「マルクスとウェーバー」と言われているからウェーバーを始めたら面白くなって、ウェーバーにはまった時期があったわけです。ウェーバーにこだわり、ウェーバーを拠り所にしながら20世紀を考えようとした思想家という意味でパーソンズにも興味をもったことはあったんですが、彼に思想的にコミットとしたかと改めて問われると何ともいえない。一番自分の中に影響の痕跡をとどめているのはウェーバーかもしれないと思います。

加藤） この点がこれまでのお話で、私が一番伺いたかったことです。

宮本憲一先生との出会いとニューヨーク留学

加茂） 話の続きですが大学紛争がある程度収まった頃だったと思いますが、大学からの帰りに駅で商学部の宮本憲一先生に会いました。宮本先生は30代半ばにして名著『社会資本論』（有斐閣）を出され、市大の商学部に招かれていた著名な先生でした。大学紛争のなかで何度か顔を合わせる場面があり、あれが『社会資本論』の宮本教授だと知りました。

駅のホームで声を掛けられ、「一つ頼みがあるんだが」と切り出され、「堺泉北臨海工業地帯でひどい大気汚染が起こっているみたいなので、学際的なチームを作って調査しようと思っているが、君も政治学の立場から調査に加

わってもらえないか」と言われました。私も公害問題のことは気になっていましたので、参加させてもらうことにし、水口さんにも一緒に加わってもらいました。それから数年がかりで調査をしました。堺市から高石市にかけての広大な海岸線の松林や砂浜を壊し、海を埋め立てて巨大な工業地帯を作ったこのプロジェクトの経緯・顛末を調べるために 20 数名の研究者が参加し、埋め立て地や近隣の住宅地を歩き回り、大阪府や堺市、高石市の幹部、住民、公害被害者団体などにインタビューし、統計や議会議事録などの資料を渉猟した大掛かりな研究でした。

その成果は『大都市とコンビナート・大阪』（1977 年）として筑摩書房から出版されましたが、私にとっては初めての地域調査になりました。この共同研究は、私に現場に出かけて社会問題を調査する経験を得させ、その後も何かにつけて現場を見に行く習慣をつけさせてくれました。その時には意識していなかったのですが、戦後の日本資本主義が、重化学工業化と地域開発を旗印に経済成長をスタートさせていったありさまを、地域という場面から眺めていたことにもなります。このことを教えてくれた宮本先生は、形式的には学部も分野も違いましたが、実質的には第四の恩師でした。

『大都市とコンビナート』を出した後、私は留学のことを考え始めていました。ちょうどその頃、宮本先生が国際財政学会でニューヨークに行かれたこともあって、留学の相談をしたら、「ニューヨークがいいんじゃないか。面白い都市だし、日本人も多くてカネはかかるけど、便利なことこの上もないよ」と言われました。当時ニューヨークは、財政危機で治安も悪く、犯罪都市と言われていましたが、「危なくないところも多いのでそんなに怖がることもないよ。もしもの時に強盗さまに差し上げるために、財布とは別にズボンの尻ポケットに 50 ドルいれておいたらいいよ」（笑）と言われ、とりあえずニューヨーク行きを前提に国際文化会館の新渡戸フェローシップに応募しました。新渡戸フェローは派遣期間 2 年でしたので、じっくりアメリカ体験ができると思ったのです。2 度目の応募で採用され、78 年～ 80 年の留学

が決まりました。私の留学先はニューヨーク市立大学で、大阪市大のカウンターパートみたいな大学を選んだことになります。ある審査員が、多くのフェローはハーバードやエールに行きたがるのに、ニューヨーク市立大とは珍しいねと言っていました。それが採用された理由のようです。

当初私はニューヨークの民主党マシーンのことを勉強するつもりで行ったのです。実際に民主党の地区リーダーたちを訪ねてインタビューもしましたが、マンハッタンを歩き回っているうちにニューヨークという都市そのものが面白くなってきました。都市への関心は明らかに宮本先生の影響でした。のちにゲーテの『イタリア紀行』を読んだら、「ローマ滞在記」のなかで、ローマという都市は卓越した文化、文明の宝庫で、街を歩いているだけで優れた文物や人物に巡り合え、一日歩くと知的な好奇心が触発されて興奮し、夜になるとくたびれ果ててしまうような都市、そういう意味で「世界都市」（Weltstadt）だと書いていましたが、78 ～ 79 年の私もまさにそんな感覚を追体験していたのだと思います。

宮本先生の『都市経済論』（筑摩書房）は、私がニューヨークに行く前にはまだ出ていませんでしたが、そのもとになる文章はいくつか書いておられ、とくにルイス・マンフォード『都市の文化』についてはたびたび言及されていましたので、私は都市についてのインスピレーションを宮本先生に触発されていたのだと思います。

ニューヨーク市立大学では、歴史家でJ･F･ケネディのアドバイザーだったアーサー・シュレシンジャーとか都市史の大家リチャード・ウェイドのゼミを聴講させてもらいました。シュレシンジャーは、アルバート・シュバイツァー・プロフェッサーという称号と専属の秘書を二人与えられ、専用のゼミ室をもっていました。彼は自分の部屋から廊下を通らずに直接ゼミ室にでてくるのですが、常に蝶ネクタイに葉巻をくわえていて、超エリート学者の趣がありました。ゼミの聴講を頼みに研究室に行ったら快く承諾してくれ、今期は冷戦の歴史をテーマに一回一冊ずつ本を読むと言われました。報告者

が一冊ずつの本について問題提起をし、みんなで議論をしました。何を読んだかは忘れてしまいましたが、入江昭さんの『アジアにおける冷戦』、ミロバン・ジラスの『新しい階級』、ウイリアム・A・ウイリアムスの『アメリカ外交の悲劇』などがあったのは覚えています。ウエイドのゼミでは、私も日本の近代都市について報告しました。江戸時代の長屋のことを話したら、みんなが面白がってくれました。

そういうわけで、大学も面白かったのですが、それ以上に街を歩き回って見聞きしたことがなにしろ面白かった。グリニッジ・ビレッジに「ストランド・ブックストア」という古本屋があり、その地下にニューヨーク・コーナーがあったのでよく通いました。そこで買い集めた本を持って帰り、ニューヨーク市政史でも書こうかと思っていたのですが、「都市自由主義とその時代」という論文を一本書いただけでした。「断捨離」でほとんどの本を処分したときも、ニューヨーク・コレクションだけは残したのですが、病気で体力のいる仕事ができなくなってしまいました。このぶんではせっかくのニューヨーク・コレクションも結局断捨離せざるを得なくなるかもしれません。

ニューヨーク市立大の大学院は当時マンハッタンの 42 丁目、タイムズ･スクエアの近くにあり（いまは 5 番街のエンパイア・ステート・ビルの向かいに移転)、「アーバン・ユニバーシティ」らしく、市民団体のオフィスなども構内にいくつかあり、大学内外のいろんなグループが講演会やシンポジウムを盛んにやっていました。「シティ・クラブ・オブ・ニューヨーク」という 19 世紀末の市政改革運動のなかでつくられた市民団体もここにオフィスを置き、夏と春の休み以外は毎週金曜日にニューヨーク市に縁のある学者、政治家、市民活動家などをゲストにランチョン、昼食講演会をやっていました。大学のなかを探検するうちにこの団体を見つけ、この金曜日の昼食会にも顔を出すようになりました。シティ・クラブだけでなく、ニューヨーク市立大の政治学大学院も公開講演会などをよくやっていました。私は大学院の公開

講演会で文芸・社会評論家のアーヴィング・ハウの講演を聞いたときの印象が強く残っています。ハウは民主的社会主義者と言われた人でした。今のバーニー・サンダースにつながるのかどうかよくわかりませんが、1930年代あたりには、アメリカにも「社会主義」を標榜するグループができていたようです。70年代に始まったアメリカの保守化のことがハウの講演のテーマで、この保守化の流れは行き着くところまで行くだろう。リベラル派が従来のような福祉国家の再建しか提案できないならば、リベラリズムは再生できないだろうというのが、ハウの意見でした。私にはとても刺激的な話でした。

ニューヨーク体験については、1983年に出した『アメリカ二都物語』（青木書店）に書きましたが、ニューヨークでの都市体験が私の政治学を都市研究にかなりの程度シフトさせたきっかけであったことは、間違いありません。

徳久） 1983年に山崎時彦先生のところでまとめられた『政治思想史　保守主義の生成と発展』に掲載された先生の「「保守化の時代」の思想構造をめぐって」という論文は、今お話し頂いた、アメリカでの保守化が不可逆的である以上、リベラルが小手先の議論をしてもダメだという議論にインスパイアーされたということですか。

加茂） それは間違いない。

新川） 宮本憲一先生についてお話を伺いたいのですが、「西の宮本、東の松下」と言われますが、ベースは違うんですが、自治体関係者には大きな影響を与えてきて、僕も政策論で宮本先生の書かれた本を勉強しました。宮本先生の人となり、加茂先生が感じられたことを、少し教えていただけますか？

加茂） 現在、御歳90歳です。僕が本気で尊敬する人はそんなにいないですが、宮本先生は尊敬すべき人だと思ってます。もちろん学問的な業績はすごく、90歳近くになって日本学士院賞を授与された『戦後日本公害史論』（岩波書店）という大著を出されたくらいで学問研究についてもエネルギッシュ

でシャープな人だと思っています。人柄がすごく良いですね。ジェントルマンで、若手に対する思いやりのある接し方で人間的にも優れた人です。

新川） 引っ張ってきたプロジェクトとかで、割とみんなに好きにやらせておいて調整型というか。

加茂） そうではなくて、基本的なモチーフは先生が出すんです。「こういうことをテーマにしてやろう」と提案は宮本さんが出す。それに応じて「事務局には誰がいいか、誰と誰をもってくるか」というのは議論して決めていく。実際に調査をやったり、研究を進めていくなかでは、猪突猛進型の馬力のある若手を使ったり、もうちょっと温厚な人にブレーキをかけさせるとか。別に意識してやっているわけではなく、先生の人柄の中から自然に滲み出てくるような、学問的リーダーシップだろうと思いますね。

新川） 公害研究を含めて都市コンビナート研究というと、中央大学にも古城先生も大原先生もいらっしゃるんですが、横のつながりはあったのでしょうか？京葉工業地帯とかの公害問題もあったわけで、学際的なつながりがあったのだろうかということなんですが。

加茂） いま、お名前が出た人たちは直接には知らないですね。大原光憲さんとか、福武直さんとか、宮本グループで堺泉北研究する時にリスペクトすべき研究だという形でフォローしていましたけど、一緒にやるということではなかったと思いますね。一緒にやっていたのは柴田徳衛さんとかになります。

新川） ニューヨークに行かれた時は「民主党マシーン」研究に興味があったということですが、公害とか都市問題関連でいうと、ニューヨークの貧困撲滅とかゲットーの問題についての取り組みに関心はなかったんですか？

加茂） ありました。ただ、ニューヨークに留学することになったのは成り行きでそうなったということが多いので説明のつかない部分がある。間違いなく、ニューヨークはエンパイア・シティといわれるような、研究に値する世界の大都市であることは感じていたんですが。

加藤）　先生がそれまで取り組まれてきた理論研究とか思想研究に対して、調査研究というものはその反対側にあるものかもしれません。実際に堺泉北地域の調査を５年間されていたとのことですが、先生はその調査を通じてどのようなことを感じられたのでしょうか？研究として理論研究と調査研究を両方やれるとよいと常々思いますが、実際には、肌に合うものと合わないものがあります。先生にとっては、両方とも違和感がなかったのでしょうか？実際に取り組んでみると、調査研究は面白いと感じたのでしょうか？

加茂）　実をいうと堺泉北の調査を始めた後、しばらくちょっと後悔しました。「こんなに労が多くて実りの少ないことはないな」と。既存の海岸線から埋め立て地の端っこまで、ものすごい距離がある。とても歩けない。そういうところを行ったり来たりして話を聴くんですけど、結構しんどかった。後で整理してみたら意味のあるものになっていたなと思うことはあるんですが、それは後から気が付くもので、やっている時はしんどいばかりで「やめたらよかった」と思ったことも何回かありますね。宮本先生は「加茂君、アメリカの思想史もいいけど、切れば血が出るような生々しい現場の問題とぶつからないと社会科学は発展しないんだよ」と言われて、半分、無理矢理、納得してやっていたということだったと思います。だけど後になってみれば、それが自分の中に生きてきたのかなという気がしますね。

加藤）　私も理論研究が好きでこれまでやってきましたが、縁があって諫早湾干拓紛争に関する共同研究に関わっています。実際に、調査研究に取り組んでみると面白いこともあるし、大変なこともあります。ただ、自分の学問観、ものの見方や考え方が修正されるようなこともあり、個人的に大きな意味を感じています。先生にとって、堺泉北の調査は、苦労が多くて大変だったとのことですが、この調査を通じて、今までやってこられた政治学のものの見方が豊かになったとか、研究の対象が都市に広がっていくとか、その後の先生の研究者人生において何か影響がありましたか？

加茂）　そうですね。具体的に「こういう流れで、こういう成果が出てきて、

自分のものになってよかったな」という説明の仕方はできないんですね。とにかく半分「シンドイな」と思いながら足を棒にして調査をした結果、整理がついてまとまってみると意味のあるものに思えてきた。特に僕があの本で書いたことは政策過程論に近いんですね。大嶽秀夫さんの『現代日本の政治権力経済権力』(三一書房)は、最初から意識して方法・手続きを組み立ててやっているんですが、僕の場合は、政策がどういう背景から打ち出されてきて、どうしてみんなが賛成するようになっていったか、ということをぼんやり考えてた程度で、動きながら考えていました。一番興味深かったのは、あれだけの白砂青松の海岸を潰して鉄とコンクリートの工業地帯をつくるということについて、反対らしい反対がほとんどないんですね。みんな「賛成」というか、海を壊され、自然を壊されては困るんだけど、しかし地域全体の経済的発展のためにはやむを得ないから賛成しよう。その代わり、ちゃんと利益は分配してくれということでものごとがまとまっていって、ほとんど正面からの「反対論」が起こらないまま進んでいった。あのプロセスは非常に日本的な政策決定過程で面白いなと思いましたね。大阪府議会に出てきた陳情書の類を一つ一つ見ていくと、その時の雰囲気、「開発幻想」にみんなが巻き込まれていくプロセスがわかったような気がして、これは政治学として得るべきものだったと思いました。

新川)　動きながら考えるということですが、先生のニューヨークに「はまった」のも、まさに先生が動きながら、何かをキャッチしたからでしょうね。ニューヨークというのは、独特の文化の香りがある。「ニューヨークにはまった」という、この瞬間というものがありますか?「これが」という印象的な、象徴的な体験は?

加茂)　そうですね。ブロードウェイでね、「ピーターパン」のミュージカルを見たんですね。ニューヨークに行く時にはブロードウェイは意識していなかったけど、友だちが誘ってくれて娘と行ってみた。劇場の中で田舎から出てきたお上りさんと思われるような人が着飾って集まってきて、「これぞ、ブ

ロードウェイのミュージカル」という演出がされて、それにみんなが拍手喝采してカーテンコールがあるという雰囲気。田舎から出てきたおじさん、おばさんたちが集まってくるからこそ「ニューヨークはニューヨークなんだ」という雰囲気を感じて、面白いなと思ったことですね。

グリニッジ・ビレッジとかソーホーとかを歩いていると、ヒッピーとパリコレとかが同居しているような街があったり、それぞれ特徴と面白さが混在していて、歩く世界旅行のような感じになるという面白さも、はまった点だと思いますね。

新川）　世界への窓口、文明論も、ニューヨーク体験から生まれてきたわけですね。

徳久）　先生はニューヨークに出向かれる前に、ジェイン・ジェイコブズなどを読まれましたか？

加茂）　ジェイコブズの『アメリカ大都市の死と生』は読んでいた。

徳久）　事前に読んだ時に感じた印象と、実際に目にした時に感じた衝撃は違いましたか？

加茂）　ジェイコブズは、グリニッジ・ビレッジにいた人で、マンハッタンを横断する高速道路計画をロバート・モーゼスという当時のニューヨーク州の土木官僚のボスが出すんですが、これと真っ向からぶつかって闘うことになるんです。ジェイコブズが「われわれの街とコミュニティを守ろう」と旗を振って闘った。グリニッジ・ビレッジやチェルシーやソーホーというニューヨークのミッドタウンとダウンタウンに挟まれた住居地域の雰囲気を見て、なぜ彼女がここを守ろうとしたのか、その意味がわかったような気がしましたね。

加藤）　加茂先生のパーソンズ論は、アメリカの歴史的な文脈と背景があるから、あのような議論が出てくるという点を重視されていたと思います。1978年のニューヨークに行かれて、加茂先生がパーソンズ論で意識されていた「多民族でさまざまな価値がうごめくなかで秩序がつくられていく、それ

を正当化し、体系化していく形で理論ができあがる」というストーリーは、現実のニューヨークを訪れて、同じと感じたのか、それとも違っていたのか？実際に行ってみて感じたことは何かありますか？

加茂） 1976年はアメリカ建国200年で、いろんな議論が起こった時期でしたけど、「アメリカン・アイデンティティ」が壊れようともしていた。建国から2世紀経ったが、われわれの考えていたアメリカ、誇りとしていたアメリカはいま、壊れつつあるという議論が、ニューヨークで犯罪が増えてきたことと軌を一にするように起こってきた時期だったんですね。「アメリカ例外主義」、つまりアメリカという国は神さまに選ばれた世界のなかで例外的なアドバンテージをもった世界として生まれたというような考え方がずっとあったんですね。ブーアスティンもハーツもそうです。そういう人たちが1960年くらいまでアメリカの言論界をリードしていた。それがベトナム戦争の敗北とともに音を立てて崩れて「アメリカは終わり」とまでは言わないが、「われわれの考えていたアメリカは壊れつつある」という声が強くなってきた。パーソンズの描いたアメリカ像もすでに妥当性を失いかけていた。1960年代の黒人暴動やベトナム戦争はアメリカの屋台骨を揺るがす出来事だった。私はパーソンズとかダールとかの「アメリカ論」をイメージとしてもって行ってみたけれども、見ると聴くとは大違いという雰囲気を感じました。ところが、それがまたニューヨークの「再生」というような雰囲気に割と短期間のうちにガラッと変わっていく。そこがアメリカの面白いところだという感じがしますね。

政治学の断層線

加茂） 話が飛びますが、宮本グループで調査をしたり、ニューヨークに留学したりしている間、私は政治学の動向から目を離していました。この時期、日本の政治学のほうでは村松岐夫さん、大嶽秀夫さんや猪口孝さんなどが、

初期の業績を世に出し、新しい学問世代を形成し始めていました。彼らは、アメリカ政治学流のトレーニングを受け、アメリカ的なディシプリンを身に付けていました。それは一言でいえば、政治と政治学を峻別して政治学的な議論に政治を持ち込まない考え方だったと思います。学問の手法としては、ケーススタディとかインタビュー、モデル分析、数量分析などを使って現実を客観的に見ようという方法に関心があったのだと思います。それに対してちょっと古い世代の研究者は、歴史にせよ現状分析にせよ、専門分野の研究では、文献・資料を集め事実を丹念に調べ、論理を積み上げる研究をしていたのだと思いますが、メディア・論壇を舞台に評論的な発言もしていて、無意識に学問的分析に価値観やイデオロギーが入り混じることも多かったように思います。その違いがやがて 1985 年に『書斎の窓』誌上でのいわゆる「山口・大嶽論争」につながったんだと思うのですが、そういうアカデミック・マインドというか、「学問カルチャー」の断層が生まれ始めていたのが 70 年代後半だったのではないかという気がします。サミュエル・ハンチントンが『文明の衝突』のなかで、文化や文明の境界線で衝突が起こると指摘していて、これを「断層線（フォルトライン）紛争」と言っていますが、そういうものが政治学の周辺でも生まれつつあったのではないでしょうか。周知のように、こういう学問観の違いから、政治学の政治からの自律性・客観性を重視する『レヴァイアサン』という雑誌が生まれることになったわけです。

山口・大嶽論争は大きな反響や余波を生みましたし、どっちが勝った、負けたというような議論もありましたが、今思えば学問の世界でのフォルトライン紛争だったような気がします。私や水口さんは、『ファシズム』（初版は有斐閣）という本で歴史研究にいったん区切りをつけた山口先生が、80 年頃から総合雑誌や新聞で日本政治に関する評論的な発言をされるようになっていったことがやや気になっていたのですが、その結果があの論争だったような気がしました。私自身も、価値観・イデオロギーを露出させた文章を書くことが多かったのですが、そのイデオロギーや価値意識を文体の工夫でご

まかしていたようなところがありました。ですから、まともに山口・大嶽論争を批評する資格はないのですが、思想の上では山口流リベラリズムに共感しながらも、先生が大嶽さんとの議論でいささか虚をつかれた形になったな、という印象は持ちました。ジェネレーションの問題にしてしまうわけにはいかないと思いますが、やはり学問的トレーニングのバックグラウンドの違いが、日本政治の見方の違いにつながったのではないか、という気がしています。私自身は、丸山眞男さんの「科学としての政治学」(『現代政治の思想と行動』所収)やマンハイムの「政治学は科学として成り立つか」(『イデオロギーとユートピア』所収)に強い影響を受けていましたから、政治学を科学として成り立たせるためには、研究主体の価値観や立場を封印してしまうのではなく、現実政治に何らかの立場でコミットすることで政治への強い関心を保持しながら、学問の場面ではそういう自分の価値意識をそのまま表出させるのではなく抑制する。つまり、政治的思考における認識主体と客体の相互移入ということを意識しながら政治を観察することが、政治学の科学性を担保することになるのだと思っていました。「レヴァイアサン・グループ」の人たちは、こういう研究者の「心構え」や「姿勢」のようなもので科学としての政治学を担保するのではなく、もっと公準化され、カスタマイズされた方法・手続きが必要だと考えていたのではないでしょうか。私も丸山さんやマンハイムの考え方には一抹の不満を持っていましたので、同感するところはありました。

加藤)　『レヴァイアン』について伺います。加茂先生が考える「政治学の科学的な担保の方法」は丸山やマンハイムを土台にしている一方で、先生は、丸山やマンハイムのやり方は彼らだからこそ成り立ちえたのではないかともお考えであった、と私は理解しました。そうだからこそ、『レヴァイアサン』の人たちが、それだけではいけないから公準化した形で「政治学を科学として成立させる」ことにも一定理解できると。言い換えれば、先生は、『レ

ヴァイアサン』とは違う「科学としての政治学」の成立のさせ方を考えられていたのだと思いますが、『レヴァイアサン』の道も一つありえると捉えていた。そこで質問ですが、「政治学の科学化」に関して、『レヴァイアサン』とは違うけれども、丸山やマンハイムとも違う道について、先生ご自身で何か考えられていたことがあれば、お教えください。

加茂） そこまで考えていなかったというのが正直なところです。水口さんと僕は山口定さんが『ファシズム』で歴史研究に区切りをつけられた後、論壇ジャーナリズムでされた活動を見て　時々、二人で「あそこまでいかなくてもいいのにな」と話していたことがあったわけで。『レヴァイアサン』の人たちが言うように、丸山、マンハイムというような偉い学者の優れた学問的思考力と現実に対する禁欲によって政治学の科学性が担保されるというのは彼らのような偉い人しかできないのではないかと思って、『レヴァイアサン』の人たちが言っていることに同調する面もなくはなかった。方法論上の公準を共有しながら、みんなが研究するという研究のスタイルが広がっていくのがいいのではないかと。他方、猪口さんや村松さん流の研究は確かに科学性を担保しているかもしれないが、その時々の政治の本質的な問題にちゃんと突き刺さる議論をしているかというと、必ずしもそうではない。多くの人たちは科学性を担保するために、重要な政治的な問題を避けて通るやり方をする。当時の『レヴァイアサン』グループの研究スタイルは、少なからぬ人々を、そういう方向に誘ってしまったのではないかと思わないでもない。「こうだ」という一つの回答があるわけではなく、バランス感覚だと思うんですけど。

新川） 「政治学の脱政治化」を進めていくことによって結局のところ「政治とは何か」という問いがなくなった。「政治科学は政治学なのか」というパラドックスがある。科学と政治、どっちかに偏るのはまずくて、いかに緊張関係を持続させるかという問題が依然あるような気がしますが。

加藤） 新川先生にまとめていただいたことは的を射ており、「政治と科学の

緊張関係を自覚し、うまく自分の中で律していく、そして学界全体として切磋琢磨していく」ことが重要だと感じました。

政治学と都市研究の往復

加茂）　80年代に私は政治学会で2回研究発表をしました。最初は85年でした。夏の初めでしたか、自宅に東大の大森彌さんから電話がかかってきました。お名前はもちろん知っていましたが面識のなかった行政学者からの電話だったので、ちょっと身構えるような気持ちで電話をとったら、「今年の政治学会で、『都市研究と政治学』というセッションをやろうと考えている。ついてはそこで報告をお願いしたい。司会は松下圭一さん、ディスカッサントは自分がやろうと思っている」というお話でした。司会者も討論者も大物でしたので、ちょっとおっかなびっくりだったのですが、松下さんはすでに大阪市大の大学院に集中講義に来ていただいており、面識がありましたので、親近感もあってやってみようと思ったのです。もう一人の報告者は社会学の古城利明さんということになりました。私は「政治における都市、都市における政治」というテーマで話しました。言うまでもなく、古代ギリシャの都市国家ポリスが、西洋における政治という言葉や現象の由来だったので、もともと都市と政治は概念的にも実体的にも重なっていたはずであり、その重なりの意味を考えてみるというのは面白いのではないか、と思ったのです。同時に政治学から出発しながら都市研究をやっている自分の位置を考えてみるという意味もありました。実際のところ、ここでどんな報告をしたのかはよく覚えていません。ただ、フロアから当時まだ東京都におられた佐々木信夫さんがやたらに難しい質問をされ、「私は政治学者で、ここは政治学会なので政治学の言葉に翻訳してお答えします」とかなんとか言ってかわしたのを覚えています。山口先生からは鮮やかな応答だったなと褒められ、古城さんからも「答弁うまいね」と言われました。

実はその前夜、緊張して寝付かれず、睡眠不足ではうまく話せないと思って、ウイスキーをグラスで一杯ストレートで飲んでよく寝たのが成功したのだと思います。爾来、学会の発表だけでなく、重要な講演や研究会での報告のときも寝酒をやるのが癖になってしまいました（笑）。

もう一回は1988年で、このときは共通論題で報告しました。1987年に山口先生が政治学会の年報委員長になり、年報研究会の事務局仕事を依頼されました。年報研究会は、佐々木毅さん、新藤宗幸さん、辻中豊さんらそうそうたる顔ぶれで、研究会や合宿をやり、最後に『転換期の福祉国家と政治学』という年報を出しました。私は事務局役に徹していたのですが、88年の政治学会でこの年報研究会の成果を発表することになった時、佐々木さんがよんどころない事情で報告できなくなったため、急遽私が新藤さんと一緒に報告することになりました。タイトルは「福祉国家をめぐる問題状況」でした。当時盛んになっていた福祉国家の危機をめぐる国際的な議論を整理し、私なりの見方を提示したものでした。当時は新自由主義的な福祉国家批判が強くなっていましたが、必ずしも現実的な妥当性は高くないように思える。しかし、かといって古い福祉国家に戻るわけにもいかない。脱工業化とかグローバル化とかいった技術や産業構造のレベルから起こった新しい社会変化の波がやってきているので、それに対応する新しい政治システムが必要なのだろうというようなことを言ったと記憶しています。今となっては当たりまえの話ですが、フロアの反応はそんなに悪いものではありませんでした。私は年報への執筆は辞退し、のちに出した『二つの世紀のはざまで』（自治体研究社、1990年）という本にこの報告を収めました。いま考えれば、この頃の私は、政治学と都市研究との往復をしていたのだと思います。

関一研究

加茂）　とは言っても、80年代は全体として都市研究に傾斜していた時期で

した。第7代大阪市長の関一（在職：1923～35）についての研究もその一環でした。宮本憲一先生や柴田徳衛先生に誘われて、日本生命財団の「21世紀の大都市像」という共同研究にも加わったのですが、ちょうどその頃ジェフリー・ヘインズというアメリカの研究者（オレゴン州立大学）が関をテーマに研究するため宮本先生のところにやってくるという話が舞い込みました。大阪の都市研究者が関を知らないでは話にならないというので、急遽「関一研究会」をつくって歴史家の人たちに参加してもらい、ジェフを「迎え撃つ」（笑）ことにしました。宮本先生が「黒船襲来だ」と言っておられたのを思い出します（笑）。私はこの研究会の事務局を務め、関に関する資料を探しました。

関の日記とかメモとかが残っていないかを確かめるために、大阪市大医学部におられた関淳一さんという関一のお孫さん（のちの第17代大阪市長）に電話したら、「じいさんの手帳かなんかが残ってますよ。見に来られますか」という返事をいただき、宮本先生はじめ研究会の主要メンバーで堺市初芝の関家に伺ったところ、段ボール箱に入った関の日記、メモ、講演原稿などがでてきたので一同驚愕しました。とりあえず日記だけでも解読し、本にしようということになりました。2、3年前に亡くなった桃山学院大学の芝村篤樹さんなどを中心に、関日記の解読・筆写会を月に一度大阪市史編纂所で行うことになりました。立場上私は事務局役で毎回出席し、歴史文書の解読作業に参加する羽目になりました。近代文書ですから、木簡を読むような難事ではなかったのですが、歴史の素人だった私には大変な仕事でした。それが数年続いたのです。東京大学出版会が出版を引き受けてくれ、86年に『関一日記』が出版された時は本当に安堵しました。最後に索引づくりをした時は、私のゼミの学生を総動員して手伝ってもらいました。ジェフ・ヘインズ氏とは仲良くなり、一か月ほど我が家に逗留してもらったこともありました。彼はやがて『主体としての都市：関一と近代大阪の再構築』という優れた関研究の本を書きました。大阪で、ジェフの関一に関する話を聞きたいという話

が出てきて、彼が講演して私が通訳するという機会が何回かありました。ジェフは、「漫才コンビみたいやな。どっちがボケでどっちがツッコミや」と笑っていました（笑）。

『関一日記』は、日本生命財団の共同研究の産物でしたが、この共同研究の過程で、1982年、私は水口さんと1か月間、アメリカの都市を調査しに行ったことがあります。サンフランシスコから始まってミネアポリス、シカゴ、ニューヨーク、イサカ、ピッツバーグ、フェニックスといった諸都市を回って調査をしたのです。ほとんどニューヨークしか知らなかった私には、大きく視野を広げてくれた旅でした。特にアリゾナ州フェニックスに行ったときは、サンベルトのとてつもなく広く拡散的な都市圏に驚きました。

怒られるかもしれませんが、余計なことを一つ。この旅行ではわれわれは経費節減のため、ツインルームで泊まることが多かったのですが、水口氏はいびきをかく人で、彼のいびきに悩まされたのを覚えています。インタビューは主に私がしていましたので、夜、明日何をどう聞こうかを考え、まとめた後に、さあ寝ようと思ったら、水口君はすでに爆睡していて、いびきで眠れないのです。彼も長い旅行で疲れていたのだと思いますが、私も眠れないのでイライラして、よほど顔に濡れタオルをかけてやろうかという衝動にかられました（笑）。松本清張に『いびき』という短編小説があったのを思い出していました。伝馬町の牢屋に大勢詰め込まれた囚人のなかにいびきをかく男がいて、やかましくて眠れないというので牢名主の命令で鼻や口を塞いで窒息死させるという話です。私のもほとんど殺意だったのかもしれません（笑）。記憶がはっきりしないと言いながら、こういうつまらないことは思い出すというのは、どういうことでしょうね（笑）。

日本生命財団プロジェクトの全体的な成果である『21世紀への大都市像』は86年に東京大学出版会から刊行されました。『関一日記』も同じ年に東大出版会から刊行されたので、私の都市研究はいくらか実を結んだことになります。次いで1988年には『都市の政治学』（自治体研究社）という単著を書

きました。これは宮本先生の『都市経済論』を意識して、都市政治の理論を構成してみようとした試みでした。

「世界都市」研究へ

加茂）　話をだいぶ前に戻しますが、1979年に私は「世界都市」というテーマに遭遇しました。

現物もメモもないのに、不思議に覚えているのですが、この年の1月14日の『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』に出たカバー・ストーリーが、そもそもの初めでした。『ニューヨーク・タイムズ』の日曜版は、とても分厚くて、『タイムズ・マガジン』という週刊誌大の雑誌が付いていたのですが、この日のカバー・ストーリーは「アーバン・ルネサンス」というようなタイトルのレポートだったと思います。ニューヨーク市は1969年以降80万も人口が減っていました。製造業や卸売業の衰退でニューヨーク経済が疲弊し雇用が激減したためです。そのため治安が悪化し、殺人事件や銀行強盗が頻発していました。街の空気は荒んでいて、街を歩いていると、ホームレスの人が「クオーター・プリーズ」といって25セントをせびりにやってくる。都市イメージはガタ落ちです。

そこで当時のエド・コッチ市長が先頭に立ってテレビで「アイ・ラブ・ニューヨーク」というキャンペーンをやったのです。ところが一方、コロンビア大やニューヨーク大のグループが調査してみたら、ニューヨークは『フォーチュン』誌のランキングで全米のトップ500社の本社の数は減っているが、金融・保険・不動産（FIRE）、情報サービスなど、企業の本社機能と結びつく高次サービス産業ではかえってシェアを伸ばしていることがわかりました。ニューヨークは法人本社複合体（Corporate Head Quarter Complex）を中心にした中枢管理機能都市、それも多国籍企業の国際中枢機能が集中した都市になっていて、「世界都市」（ワールド・シティ）である。

そのためこうした経済の高次機能を担う上層ホワイト・カラーが増えており、そこここで、さびれてスラム化していた街が再生して活気が戻り始めているというのです。『タイムズ・マガジン』はこういう現象のことを「ジェントリフィケーション」と呼んでいました。「世界都市」と「ジェントリフィケーション」という二つのキーワードが、私の目に強く焼き付けられました。ブロードウエーの劇場街にも活気が戻り、アメリカ国内よりも海外からの観光客が増えて、レストランやホテルも景気が良くなってきているというわけです。

この「タイムズ･マガジン」レポートを読んで、私のニューヨーク研究は、だいぶ視点が変わりました。こうした「世界都市」現象をどう考えるかが都市研究の中心的なテーマになったのです。「世界都市」と「ジェントリフィケーション」のことは、1980 年に宮本グループの科研報告書に書き、83 年の『アメリカ二都物語』（青木書店）でも紹介しました。「世界都市」という概念は 80 年代から学会でも議論されるようになり、ジョン・フリードマンの「世界都市仮説」、ジョン・モレンコフとマヌエル・カステルの『二重都市』、スーザン・ファインスタイン、イアン・ゴードン、マイケル・ハーローの『分裂都市』などが、こうした概念について議論し、91 年にはサスキア・サッセンの『グローバル・シティ』の初版が出ました。サッセンは、「世界都市」というのは古代ローマや唐の長安にみるように、昔からあった現象だが、現代のニューヨーク、ロンドン、東京、パリなどは、世界経済が文字通り地球的な規模で結合したなかで、その結合の結節点の役割を果たす都市なので、「グローバル・シティ」というのがふさわしいと言ったのでした。要するに、グローバル・シティは、世界都市の一種、現代的な世界都市だというわけです。ウイリアム・タブやスーザン・ファインスタインなどは、世界都市は法人本社複合体で働くホワイトカラー（ジェントリー）も増やすが、彼らにサービスして暮らす移民労働者など下層階級も増やすという二面性を持っており、一つの都市の中に二つの都市をつくる性質を持っている。そ

の意味で二重都市、分裂都市だと言ったのです。誰だったか、チャールズ・ディケンズの『二都物語』は A Tale of Two Cities だが、ニューヨークは、Two Tales of a City だと言っていました。私の『アメリカ二都物語』は、ニューヨークなど、アメリカ社会におけるこういう光と影を表現しようとした本でした。

世界都市論の展開と都市研究のグローバリゼーション

加茂）「世界都市」論は、80 年代以降の社会のグローバル化を反映した議論でした。同時に、世界中の都市研究者が「世界都市」を論じ始めたことで、都市研究もグローバル化し始めました。私も世界都市について英語のペーパーをいくつか書きましたが、それを読んだ海外の研究者から国際シンポや共同研究へのお呼びがかかり始めました。最初はニューヨーク市立大学のジョン・モレンコフで、彼がチーフで、アメリカの SSRC（社会科学研究協会）や日本の国際文化会館などがスポンサーになった世界都市の比較研究に招かれました。ニューヨーク、ロンドン、パリ、東京の比較をするプロジェクトでした。『都市と文明』という大著を書いた著名な都市学者ピーター・ホールもメンバーでした。この共同研究で、4 つの都市を回ってシンポジウムをやりました。次に、UCLA を退職してメルボルンにいた地理学者ジョン・フリードマンからもメールが来て、「アジア太平洋都市ネットワーク」というプロジェクトに招聘されました。メルボルンを皮切りに、台北、香港、大阪でワークショップをやりました。私もフリードマンに頼まれ、国際交流基金の助成を得て大阪市大でシンポジウムをやり、最後に朝日新聞社の協力を得て「都市は国家を超えるか」という公開シンポをやりました。さらに 1997 年には、先日亡くなった北欧アジア研究所（NIAS）の研究員で、のちにヘルシンキ大学の都市研究の教授になったアンネ・ハイラさんから、ヘルシンキで「グローバル化するアジア都市」というワークショップップをやるので来

てほしいというメールをもらい、初めて北欧に行きました。ヘルシンキでワークショップをやった後、彼女のアレンジで、フィンランドでいくつか講演をし、その後コペンハーゲンのNIASに短期招聘研究員として招待してもらいました。旅費宿泊費がみな支給されることになって、喜んでチボリ公園やシェークスピアの『ハムレット』のイメージのもとになったと言われるクロンボー城などを見て回りました。ちょうど白夜の時期で、午後11時ごろ日が沈み、2時ごろには白み始めるという体験をしました。ヘルシンキでのワークショップで発表されたペーパーは2000年に『アーバン・スタディーズ』という都市研究のジャーナルに掲載されたのですが、ハイラさんが編者で、私の論文を巻頭論文として掲載してくれました。2007年に大阪市大に「都市研究プラザ」という研究組織をつくったときは、私が初代所長として創設記念の国際シンポを2006年に開催しましたが、そこへ彼女を招待したらすごく喜んで来てくれました。彼女が私より早く亡くなってしまったことは、なんとも慙愧に堪えません。もう一つ付け加えると、「香港都市計画環境管理研究所」が2000年に主催した国際シンポジウム「グローバル・シティの再発見」にも招待してもらいました。このシンポでは、東京都の総合計画の変遷を報告し、石原都政のもとで「世界都市東京」計画が打ち出されるに至った経緯を報告しました。

とにかく1990年代から21世紀初頭は、そんな調子で、私自身が「世界都市」論を論じ、結構グローバルな活動をした時期でした。業績目録をみていただいても、英語の論文やプレゼンテーションがこの時期に集中しているのがお分かりいただけると思います。

この過程で私の研究には、アジアとのつながりもできました。1993年から95年にかけて私が研究代表になって科研の共同研究を行い、『東南アジア―サステナブル世界への挑戦』（有斐閣）という本を出しました。関西の中堅の研究者たちのグループで、実質的に研究を企画し引っ張ってくれたのは大阪経済大学（当時）の遠州尋美さんでした。フィリピン、タイ、マレーシア、

シンガポールなどを調査して回りましたが、ちょうど87年のフィリピンの民主化革命を皮切りに東アジアで連鎖的に民主化が起こった時期で、政治の民主化と合わせて地方分権改革が進み始めており、各国に地方分権に関心を持つ若手官僚や研究者が現れていました。そういう人達と交流したり、特にタイではバンコクのスラム・コミュニティや東北部農村のタンボンといわれる自治体に入って、聞き取りをしたりしました。日本の大分県に始まった「一村一品」運動は、農村発展のモデルとしてアジアにもよく知られていましたが、タイの東北部は一軒の農家がコメや野菜を作り、村共有の森で樹木を育て、家畜を飼い、池で魚を育てる「アグロ・フォレストリー」という多角経営が営まれていたのが印象的でした。自給自足をベースにしながら近隣農村の範囲で局地的市場圏が成り立っていたわけです。ただそういう東南アジアで、のちに世界銀行が『東アジアの奇跡』と呼んだ急激な経済成長がすでに起こっており、それがやがて97年の東アジア通貨危機につながった。われわれはその直前のタイを見ていたわけで、貧しいながら牧歌的な地域社会を眺めていたことになります。タイやフィリピンで印象的だったのは、「分権改革」（ディセントラリゼーション）が国を超えた共通現象として注目され、こうした共通現象を比較するのが社会科学における一つの流れになっていたことです。分権改革の世界的な震源地は北欧で、福祉国家の行きづまりを打開するためにスウエーデンなどが始めた「フリー・コミューン」制度、つまり福祉国家の下でできた中央集権的なシステムを改め、自治体に権限や財源、人員を移す改革でした。フィリピンなどは、87年の民主化革命の後、アキノ大統領の下で、北欧型の分権改革をモデルにして地方自治制度をつくろうとしていました。そういう活気が地方自治の現場に横溢していて、われわれの調査も活気づけられていた感じがします。

もっともマレーシシアやシンガポールは「開発独裁」でもあり、言論の自由も制限されており、クアラルンプールで反体制派の研究者に面会した時は、ひそかに人に見られないように来るように言われて、改革の動向が一様

ではなかったことを実感しました。タイではその後2006年、2014年に軍事クーデターが起こったりしてびっくりしたものです。常に、強い軍部、国民から尊敬される国王、成熟しない政党政治などがからまって、軍事クーデターを「恒例」化させていたのかもしれません。

アジアの地方分権の研究といえば、九州大学の藪野祐三さんがオーガナイズした共同研究でも、タイの調査をしたことがあります。藪野さんは大阪市大で私の2年後輩、吉富ゼミの出身でした。北九州大学から九州大学へ移りましたが、非常にアクティブな人で、次から次へ本を書き、国際会議で発表したり、テレビのコメンテーターをしたり、活躍していました。この共同研究は『アジア太平洋時代の分権』（九州大学出版会）という本を出して終了しました。

タイとの縁はその後も続き、97年に大阪市大へ赴任した国際政治の永井史男さんがタイの専門家で、タマサート大学やチュラロンコン大学の研究者とパートナーシップを結んで、バンコクと大阪で会議をしました。タマサート大のメンバーには政府の国家分権委員会の委員をしているような有力な研究者もいたので情報ソースとしてはきわめて上質でしたが、国会議員選挙に出馬する人も出てきて、共同研究としての成果は出せていません。

徳久）　昨日のお話とも、この後の市大のスタッフに関する話題とも関係しますが、先生がおられた頃の大阪市大には、2つの核があったように思います。一つは、毛利敏彦先生らをはじめとする歴史研究という核で、もう一つは、政治学という核です。2つの核である「歴史学」と「政治学」は、大阪市大ではどういう関係にあったと思われますか？

加茂）　うーん、どうだったかな。大阪市大の歴史研究者は主として文学部の史学科にいたわけで、「関一研究」は文学部の人たちが中心にやってくれたんですね。毛利さんなどは興味は示してくれたけど、あまりそういう仕事に入ってきてくれなかったので研究上の直接的なつながりはなかったです

ね。法学部の政治学の中にある歴史研究の系譜と文学部の史学とは、ほとんど交わってなかったような気がしますけどね。少なくとも私は両者に等距離でした。

加藤） 加茂先生は、「理論研究」から始まり、宮本憲一先生の影響もあって「都市研究」に移られた。関一研究で「歴史研究」と交差することになる。「歴史研究」の人たちと文書を読み解く作業をされてみて、先生にとって得られたものは何がありましたか。例えば、研究上の、広い意味でのものの見方とか研究のアプローチとか、関一研究で得られたものは何がありましたか？

加茂） 「歴史研究は大変だな」と思いましたね。索引にあげる一人の人間の正体を突き止めるのに、戦前の紳士録・市職員名簿・電話帳まで調べたりして、何人もの人たちが3日間もかかるとか、そういう作業をやりながら歴史研究は進められていた。ましてや古代文書、木簡とか、考古学的な史料を含めてやるような仕事は大変なことだと感じさせられて、あまり僕はやりたくないなという気持ちになったのを覚えています。だけど、市史編纂所の研究員とか図書館・資料館の学芸員の人たちはそういう地味な歴史資料の発掘・分析をやっていました。その人たちと数年間付き合ったのは、感覚としては非常に得るものがあった。要するに、学問研究をやる上でのみんなの共有財産になるインフラのようなものを彼らはつくっている。そういう人たちの層があって初めて研究は成り立っているんだなということを教えられた。

新川） 関一という人物からわかったこと、日記や備忘録から名前がわからず、調べたということはうかがいましたが、関一の人物について重要なことなどはありましたか？

加茂） 「アーバン・リベラリズム」という言葉があります。大正から昭和にかけての都市を母体にした改良主義的な政策を、中央集権的な体制のもとで大阪市はやった。大阪は当時、東京より大きく、日本最大の都市だった。大阪市の財政収入も日本の自治体の中で傑出していたわけで、他の自治体がや

れないことをやったわけです。大阪市立大学をつくったのもその一つで、大学を自治体が設置運営するなんてことは考えられなかったが、大阪の経済人たちのなかには「帝国大学とか早稲田、慶應のような私立大学とは違う、都市で仕事し生活する人間にとって、もっと親近感のある高等教育機関があってもいいんじゃないか」という雰囲気が明治の終わりからあったみたいで、大阪市大の前身である大阪商科大学のOBたちのなかで、「市立大阪高商の商科大学昇格運動」が起こった。関一はそれに押されたわけで、市が大学を設置運営することは大変だと認識しながら、「大阪市民のなかにそういう気運があるのなら、大都市の中にあえて大学、高等教育機関をつくる意味はあるのではないか」と言っていて、結果的に「高商の大学昇格」を一緒に文部省に働きかけたわけですね。都市は社会問題が吹き溜まっているところであるからこそ学術とか文化を「社会改良のための装置」としてつくっていこうという発想が市立大阪商科大学をつくった背景にあったと思います。

一事が万事そうで、関一は在任中に社会改良的な政策をたくさんやっています。それがちょうど僕から見ると、ニューヨークで1920年代にアル・スミスというアイルランド系の州知事がやった「小福祉国家」と言われた改革と重なり合うのです。ニューヨークはヨーロッパからやってくる移民労働者の吹き溜まりでしたので、社会問題が集中していた。財産のない移民労働者が社会的地位を向上させていくチャンスを開くため、すでに19世紀半ばには授業料無料の「シティ・カレッジ」がつくられていました。アイルランド移民の子だったアル・スミスはそういう土台の上に、1910～20年代に上院議員のロバート・ワグナーらとともに、労働者保護、家賃統制、乳幼児と母親への医療費補助とか、ホームルール法の制定などの都市改革をやったわけです。関の都市改革も1920年代ですから、国際的に時をほぼ同じくして、都市の社会問題を解決する「社会改良政策」が出てきたんだと言えます。洋の東西を超えて、こうした気運が出てきたのが20世紀初頭だった。ロンドンではフェビアン協会やロイド・ジョージなどが出てきて、ロンドン改革運動

や社会政策が行われるわけです。都市の社会改良政策が、世界の大都市のそこここで起こっていたわけで、関一も、その時代のそのようなグループの一人だったのではないかと思います。「アーバン・リベラリズム」をテーマにした本を書きたいなと未だに思っているのです。

新川）　よくわかりました。大阪市立大学が走り、モデルになるところだと。

加茂）　間違いなく、大阪市立大学はモデルで、日本で初めてできた市立大学ですね。

新川）「アーバン・リベラリズム」の重要性がよくわかりました。

徳久）　都市のあり方が少し変わって行きますよね。都市空間を公共空間として、どうデザインして人々が生きやすい空間をつくるか、戦前は、社会改良主義的な発想が主導したのに対し、戦後は、都市工学や建築学など、技術的観点から都市をいかにつくり、支配するかという側面が強く出てしまう。つまり、戦前の都市管理の仕方の発想と戦後の都市管理の仕方に分断があるという印象があるんですが、先生は、都市をどうデザインし、どう守っていくかについて、どのようにお考えですか？

加茂）　分断はあまりなかったのかもしれないという気がするんですね。関一と一緒になって日本の都市政策、都市計画に力を注いだ人物は東京市長だった後藤新平ですが、関東大震災の後、これを機会に東京という町をつくり変えようと「後藤の大風呂敷」と言われた都市改造をやりました。昭和通りなんかが新しくつくられた大通りだったわけですが、とにかく合理的で機能的な都市空間をつくることが人々の幸せにもつながるという発想で「都市計画」を本気になってやろうとしていた点では、後藤新平と関一は重なるところが多かったと思います。ただ、機能的な都市空間をつくっていこうという発想は「危機管理」「治安維持」の発想とも隣り合わせのものでした。関一は学者出身でしたが、日本の大都市に都市官僚と言われる人たちがたくさん登場してきたのも大正期だったのではないかと思います。そういう人たちは、やがて満州事変が起こり、世界全体がキナ臭くなっていくなかで都市の

社会危機を予防し、管理できる仕組みをつくろう、とも考えたのではないか。ビスマルクの社会政策と一脈通じます。歴史研究者のなかには関一は都市官僚の走りで、上からの都市管理、秩序維持を考えた人物だったという人もいます。これはわれわれの「関一研究」とは少しちがった「関一像」ともいえるのですが、確かに両面あったのでしょう。関一の日記を読んでも、開明的でリベラルなんですが、「国体」のもとで都市の市民たちを秩序づけないといけないという考え方も、ちらほら出てくるわけで、結末を見ずに死んじゃったけども、革新官僚として戦時体制に流れていってもおかしくない面があったと言えなくもない。

加藤）　面白いですね。都市の歴史のなかで、都市の役割、機能が変遷していっていると思いますが、関一が活躍した時代は、都市化・近代化が進み、活力が出てきて社会改良主義的なコントロールをする必然性も出てくる。同時に、それは戦争への対処や治安維持と隣り合わせのところもある。戦後には、「民主化」なのか、「世界都市」化への動きなのか、また違う流れが生まれてくるのでしょうね。

戦中と戦後の間、そしてそこから1980年代までの間でも、都市の機能や役割は変わってきたと思いますが、先生はそこをどう捉えられていたのでしょうか？都市が開発されることに対して反対運動が起こり、民主的なものが出てきて自治を再興する動きもあれば、他方、開発や資本の論理が押し寄せてくるなかで都市の機能が変わっていったとも思いますが、先生にとって戦後の、なかでも「世界都市」の時代の前の都市を、どのように見られていたのでしょうか？

加茂）　難しいな。戦争を挟んで戦後の都市の復興から新しい都市社会、都市政治が大混乱しながら姿を表していく過程の全貌を描くのは私には難しいので、本当はお答えできないんですが、あえて推測すると、意外とつながっているところもあったんでしょうね。

戦争中、隣組とか町内会とかがつくられます。実は、関一も「これは必要

だ」と思っていたようで「住民の共助組織、隣保共助の組織があってこそ大都市の根っ子ができる」と。隣組には「統合と排除の論理」が含まれてもいたわけです。都市のコミュニティのなかで助け合って生きる共同の営みに人々を包摂していこうという論理が働くが、そこに入ってこない人がいればのけ者にするという「村八分」の理屈も働くわけです。戦争中も大阪大空襲のもとで隣組、町内会は人々の相互扶助の組織として奮闘するわけですが、町会長の言うことを聞かない人は弾かれるという怖れと隣り合わせだったのではないか。こういう都市社会の基底にある住民組織は、実はかなりそのまま戦後に持ち越されていったんではないでしょうか。占領軍が入ってきて隣組、町内会は軍国主義の末端だったというので、公式の組織としては解散させられるわけですが、戦争の惨禍をみんなでくぐり抜けてきた共同体でもあるわけですから、そのままなくなるはずはないので、戦後の混乱した時代を生き抜くために、人々はそういう組織を作り直しながら暮らしていったという気がするので、やがて占領が終わった昭和29年か30年には当時の自治省が都市のコミュニティを復活させようということになるわけです。ただし、占領軍の行ったことをいきなり否定するわけにいかないので、大阪ではたしか「日赤奉仕団」などという名前で町内会が復活する。混乱し右往左往しながら、事実上、組織は続いてきたのだろうなと思うんです。「都市共同体」をつくり、それと「都市官僚」が一体になって都市を運営するシステムをつくりあげたと思います。その後はたしか「地域振興会」「振興町会」として引き継がれているのかな。大阪市は関一のせいかどうか、「都市の共同体」をうまく生かすことに長けていた自治体だったという気がします。だから逆に本格的な都市政治が起こりにくい。一時以降、大阪市長選挙が接戦になることは少なかったわけです。「維新の会」のポピュリズムは、それに対する反動かな。

徳久）　大阪では、戦前・戦中の制度が残り、戦後にも都市行政の体制が住民との関係と都市官僚との関係でつくられていった。大阪市はそれを担保し

てきた。ところが、経済的な理由から、ニューヨークで見られたように、ジェントリフィケーションを促すような「再開発」圧力がかかると、そこにあったコミュニティは除去されていく。後続には、今までと違う人為的な空間がつくられていって、そこに住む人たちはコミュニティをつくろうという発想を強く持たない。タワーマンションなんか管理組合があるかないかわからない状況のまま、人々は暮らしています。このようになってくると、都市のありようも変わってくるような気がしますが、都市を大きく変える外からの力と、それに対抗して都市を支えようとする力、この2つの関係は、どのように変わったとお考えですか？

加茂）　それはいまや大阪を離れてしまった僕には難しいんですが。徳久さんが住んでいる福島区なんかは典型だと思うんです。京都でも同じように観光開発が進んで、ホテルとかマンションとかがどんどん建っていく。京都の場合は、都市計画上の規制として建物の高さ制限が強く残っているのでタワーマンションは建てられないんですけど、でも次から次へ10階建てくらいのホテル、マンションが建って、これまでの町家が壊されていくことになっているわけですね。もっとも京都は不思議なことに住民の共同体はまだいくらか残っていますね。コロナの夏なのに地蔵盆をやるという地域もあってびっくりしたんですが、そういう意味で「住民の共同性」が、まだ完全には壊れていない都市だという気がする。大阪の場合も場所によると思います。福島区のような新しい地域でタワーマンションがドンドン建っていくというところで、タワーマンションに自治会をつくろうという雰囲気は全然ないのですか？

徳久）「お抱え」という形ではあります。

加茂）　回覧板を回すとか広報を配る機能は必要なわけですね。大阪市でも行事やイベントに人に出てきてほしい。天神祭の神輿を出さないといかんということもあるので全然壊れているわけではないだろう。大阪市は戦争の時、阪和線の美章園のあたりまでは焼けたんです。焼けた地域は焼け跡闇市

のカオス状態になって地域共同体は崩れたでしょう。ただ周辺区は戦災を免れて居住年数の長い人たちがいる。地域のボスというか世話役がいて地域をまとめているところがかなりまだ残ったのではないかという気がする。それとタワーマンションの世界がどうつながっていくのかは現地で観察しないとわからないですが。

徳久）　少しだけ話を変えます。都市における分断は、かつてからありますが、現在のニューヨークなどを見ると、深まっているようにも思えます。資本の論理が強まれば強まるほど、地域は分断され、貧困者たち、何らかの支援の対象になっていた人たちは、苦しい立場におかれる。その一方で、経済的な強者は自助可能で、富裕層はゲーティッド･コミュニティに引きこもる。都市の分断を深めた「グローバル化」と「脱工業化」という外生的変化は、例えば、アメリカと日本といった国ごとに異なる影響を与えているのか、それとも、世界的に同じような影響を与えているのか、どちらだとお考えですか？

加茂）　9･11 テロのあと、ニューヨークの様子を見に行ったんです。電話帳で、破壊された世界貿易センターの北隣りの地域の住区協議会（ネイバーフッド・アソシエ―ション）の番号を探して電話したところ、会ってくれるというので行ってみたら、そこはマンションの一室で、協議会の会長の家でした。女性の会長さんが言うには、貿易センターのある地域はもちろん大変で、政府はその地域の後始末には力を入れているが、実は隣の住区でも大量の粉塵が空気中に漂って街や家は埃だらけ、住民は呼吸器を傷めたり、トラウマに悩まされた。私たちはそういう問題を取り上げて住民集会を開き、市にたくさんの申し入れをしたということでした。そのような意味で住民の共同組織があるということは重要だ、と言ってました。70 年代の財政危機の時期にも、ブロック・アソシエーションとかネイバーフッド・アソシエーションとかコミュティ・ボードといった地域の住民共同組織、住民代表組織がたくさんできて、タイムズ・スクエアの再開発とかタワービルの建設などにつ

いて住民の意見を出し、計画を修正させたりした。ニューヨークみたいな世界都市でも、大きな問題が起きた時、住民がまとまって行動する共同体組織ができあがってくるものだなと思いました。そういう共通性はあるんじゃないか。阪神淡路大震災のときも、本震直後の救助は消防団も含めて住民の協力でやった。同時に行政機能がマヒし、住民の共同体も力が及ばなかったところへNPOが登場した。新しい機能的なコミュニティです。ただこれからの日本の大都市の場合はどうかと考えてみると、もう一つよくわからない感じがします。ちょっと次元が違いますが、コロナのような問題が出てくると、NPOが出てきて何とかしようとしてもホームレスのような人たちは完全にほっぽり出され、住民の共同組織もそこまで手が伸びないというきらいがあるのではないか。コロナはその意味でも都市社会や共同体のありようを大きく変えていく可能性があるなという気がしていますけどね。

加藤）『都市の政治学』をお書きになって、加茂先生は「都市研究」と「政治学」という交錯領域で、宮本憲一先生が『都市経済論』で取り組まれたように、基礎的概念の組み立てを行おうとした。先生は「政治学から見た都市研究」をされていて、この本を書かれた段階で、国政レベルの政治との違いや、都市政治固有の重要な概念や見方として、何を重要だと考えられたのでしょうか？この本をまとめられていく過程で「都市の政治の固有性やダイナミズム」に関して、どのような発見をなさったのでしょうか？

加茂）　書き始めた時は野心的なことを考えていて、簡単な概念から複雑な概念へ、だんだん上向的に組み立てながら都市政治の世界を概念的に組み立てる作業をしてみたいという思いにかられたわけです。マルクスが「商品」という資本主義社会のエレメントから、上向して資本主義のメカニズムを考えようとしたようなことを考えたわけです。

それと同じようなことを宮本憲一さんは『都市経済論』の中でやろうとされたので、真似をしようとしたんですが、私の方は成功していません。頭の体操としては、やってみる意味はあったと思っているんですけどね。でもみ

んなこの本を読んで、どっちかというと面白いのは後半だ、各論が良いと言うんです。

加藤） 概念的に組み立てていく話は、加茂先生の20代の仕事から密接に関連しているような気がします。政治という現象の固有性を、「都市」の器で考えてみるという点で、『都市の政治学』は、理論研究から政治学の道に入っていかれた先生の原点にもつながっているように感じました。でも、この本は「後半部分が面白い」という意見が多いのですね。私自身は、先ほど述べた点で前半も面白かったですし、加茂先生らしさが出ており、興味深かったです。

徳久） 「世界都市」の原語ですが、世界都市の議論がさかんになり始めた頃は、「ワールド・シティ」と表現されていました。それが、サッセンの著書が出版されて以降、「グローバル・シティ」として議論を限ることが増えたように思います。「ワールド・シティ」と「グローバル・シティ」は重なるけれど、違うという感覚が私にはありますが、先生はどのように捉えておられますか？

加茂） それはサッセンが『グローバル・シティ』の第二版で説明していることですけど、「グローバル・シティは世界都市の一種だ」というわけです。世界中の広い地域に触手を伸ばして、そのテリトリーを治めるような都市はローマや唐の長安みたいな形で大昔からあった。長安には西洋人も来ているし、白人からアラブ系からモンゴル系、日本人も集まっていたので、それは「世界都市」だ。「グローバル・シティ」というのは、それだけではない。経済とコミュニケーションのネットワークが地球的規模で張りめぐられた一つのネットワークのなかでつながった時代におけるニューヨーク、ロンドン、東京などの都市はネットワークの中の「ノード」、結節点である。早い話が、太陽が東から上がって西に落ちていくにしたがって、まず東京の金融市場が開き、そこから香港、シンガポール、ロンドン、ニユーヨークと西の方へ、時間を経るごとに世界のマーケットが、次々と連動しながら開いて

いって、それがつながることによって株価や為替相場が動き、世界経済は動いていくので、その意味では単に広い地域に触手を伸ばしているだけではなく、一つにつながったシステムの要所、要所を都市が押さえているという形で今の世界経済はできあがっていくのではないか。そういう考え方をサッセンはとっていて、「現代の世界都市は単なる世界都市ではなく、グローバル・シティである」と言っている。グローバル・シティは世界都市の現代版であるというんですね。一応、僕も、サッセンの主張はもっともだと思って、そういう用法を使っていますけど。

徳久）　先生が、そこに足したいものはありませんか？サッセンが意味していることはわかるのですが、先生が「世界都市」に込めている特有の意味を伺いたいです。サッセンの議論ではさほど重視されないものの、政治学者として重要な要素があるからこそ、「グローバル・シティ」ではなく「世界都市」を使いたいとか。そういう部分はありますか？

加茂）　時代の違いを問わず、「世界都市」はあって、いろんな地域の文化、人間が集まってコスモポリタンな世界をつくりあげる。僕はそういう歴史貫通的というか歴史累層的な意味の「世界都市」という言葉を好んで使ってきたと言っていいと思います。

新川）　コロナの状況が大きく社会を変えてきていて、グローバル化のなかでコロナのような問題が起きてくると「情報化のネットワーク」はドンドン進むが、人は動かない、動かさないようにする「鎖国化」というか、都市自体が「新しい人は来ない方がいい」となってきて、第二か第三の「鎖国」かなにかわからないけど、情報的な開示性は広いが、人は、どこで何をやっているか、わかっていても動けないという、そういう状態が固定する懸念もある。管理化が進む中で人が対面しないでもいい空間デザインが、ある種、出てきたりして。フーコー的、というかベンサム的とはまた違う「管理的都市」が出てくるのではないかと。

加藤）　都市というものを考える上で重要なのは、人と人がいてコミュニ

ケーションが生まれて、そこに共同性が生まれてくるという点であり、実際にコンタクトをとる／とれるのが大事な要素だと思うのです。コロナのあとに、それが大きく転換していくことになるのか。この後、都市はどのように表現されるようになっていくのか。先生方のお話を聞いていて興味深いなと思いました。

新川）　今の段階でコロナについてあまり断定的なことは言えないわけですが、確かに災害や事件が都市やコミュニティを大きく変えますね。東日本大震災が明らかに東北を変えた。原発問題は言わずもがなですが、例えば沿岸に、もう１本高速道路ができることで、かつての東北の景観は大きく変わった。東京への物流をよくして経済復興を図るという発想が根底にあって、それはそれで合理的なんだけども、東京依存の合理化です。それに対する反発もあって、まちづくり、コミュニティづくりという運動もある。僕の教えている法政大学の学生のなかにも、東北の町の「コミュニティづくり」に積極的にかかわっている学生がいる。決めつけられないけども、こうした対抗する運動が生まれて、緊張関係のなかから何か面白いものが生まれるといいなと思います。

ところで、加茂先生の「システム論」に対する興味から「都市論」への興味は視点的にはつながっている気がしています。その前のマルクス主義は、根っこにはあるんでしょうが、あまりお仕事のなかには出てこないように思う。マルクスは上下関係というか、垂直的な権力関係、国家と支配の関係を考えてる。加茂先生の中にそうした「体制論」がないということではなく、「体制論では見えない横断的な政治をみたい」というか、そっちの可能性を見ていきたいというところがあって、宮本先生の学問に呼応したんだろうなと、お話を聞いてわかってきたような気がしています。

加藤）　新川先生のお話を受けて、私の感想ですが、加茂先生の研究歴を伺いながら、これまで外形的にのみ理解していたものにある、内的な必然性がわかったように思います。加茂先生がどのような社会状況や学術的文脈のも

とで、どういう思考過程で研究を進められ、そこに通底する問題意識やものの見方がどのように深まっていったのかを興味深く伺いました。そして、マルクスよりも、マルクスと違う見方、例えば、ウェーバーや宮本先生の方が親和性が高かったのだろうなと分かりました。お話を聞いてみて、加茂先生のご研究がこのように深まっていく必然とその背景がよくわかり、大変面白いです。

大阪市大政治学の世代交代

加茂）　1990年代は大阪市大の政治学のメンバーが大きく入れ替わった時期でした。まず92年に水口さんが龍谷大学に移りました。長年コンビを組んだ水口氏の転出はショックではありましたが、その気持ちもある程度わかりました。あまり長く一所にいると、だんだん気持ちがよどんできて環境を変えたくなるものですね。私もチャンスがあればどこかに移りたい気持ちがありましたから、彼の気持ちもわかったので強く慰留はしませんでした。その後、誰をとるかということになり、真渕勝さんに来てもらうことにしました。真渕さんは間もなく『大蔵省統制の政治経済学』という本を書いて一躍、政治学・行政学で優れた研究者として注目され、やがて政治学会の理事長も務めました。ちょっと神経質に見えるところもありましたが、ユーモアもあり、遊び好きで愉快な人でもありました。また政治学のポストが一つ増えて公共政策論の人事ができることになったので、大西裕さんに来てもらいました。彼は、若い頃は「ドラえもん」に出てくるのび太くんを思わせる風貌でしたので（笑）、よくその話で冷やかしたものです。二人の若くて優秀な同僚を得て私もリフレッシュしました。今思えば短い間でしたが、われわれ3人は結構仲が良く、真渕さんの篠山の家に大西・加茂が泊まりに行ったり、河内長野の私の家に彼らが泊まりに来たりしたものです。大西さんも政治学の共有財産になるような優れた仕事をいくつもして、いまや政治学会の理事長に

なりました。3 人で大阪のキタやミナミで一緒に飲んだり、屋台のラーメンを食べたりしていたのは、短き良き時代だったという感じがします。そのわれわれを笑いながら眺めていたのが政治学史の小笠原弘親さんでした。小笠原さんが 2000 年に夭折されたのは、残念な出来事でした。私は法学部のスタッフを代表して病院にお見舞いに行きましたし、宝塚のお宅にもお葬式の前後に何度か伺い、告別式では弔辞を読ませていただきました。何とも言えず素敵な人でした。

せっかく来てもらった真渕さんは、やがて京都大学に移りました。母校から呼び返されたわけでそれは仕方ないと思って見送り、代わりに姫路獨協大学にいた稲継裕昭さんに来てもらいました。大阪市職員として実務の世界に身をおいた稲継さんは、公務員人事・給与の研究という分野の開拓者みたいな仕事をした人で、ハンサムで懐の深い人でした。行政学の研究をしながら、さまざまな実務を苦にせずにこなした有能な人でもありました。

90 年代は平井友義、山口定、毛利敏彦先生らが定年退職や転出で市大を去られ、後に石田憲（国際政治）、野田昌吾（欧州政治史）、中北浩爾（日本政治史）さんらが着任して市大政治学の陣容が一新された時期でした。90 年代に来てもらった若手の人たちも、優秀で大きな仕事をされましたが、市大出身だった野田さんが現在も在任しているのを除いて、他の人は在任期間が短期だったため、教授会で政治学の人事は不安定だと批判されたこともありました。

稲継さんの話に戻りますが、2002 ～ 04 年に私が日本政治学会の理事長を務めたとき、常務理事を引き受けてくれ、二人のコンビで学会運営にあたりました。その頃は政治学会の理事選挙で、組織票で理事長ポストを争うような動きがあり、私はそういういざこざに巻き込まれた末に、理事長に選ばれたので複雑な心境でしたが、稲継さんが有能な常務理事だったので大いに救われました。私の理事長在任中に学会事務センターが倒産し、同センターに会費の管理を委ねていた諸学会が多額の損失を出すという事件もありまし

たが、政治学会は稲継さんが例年より少し早めにセンターから学会への送金を手配してくれていたので、少ない損失で済んだということもありました。

研究の面では、2005 ～ 07 年度に稲継さんを研究代表にした科研共同研究を行い、自治体間連携に関する国際比較調査を行いました。

2006 年に世界政治学会（IPSA）の大会を日本でやることが決まり、2004 年にはそのリハーサルみたいな形でラウンド・テーブルを福岡で行うことになりました。この時は私が学会の理事長でしたので、ホスト役を務め、海外の政治学者とつながりの深かった大嶽秀夫さんや蒲島郁夫さん（現熊本県知事）などが、前面に出てくれてラウンド・テーブルはうまくいきました。福岡でラウンド・テーブルの受け入れの根回しにあたったのが藪野さんでした。彼は天真爛漫なように見えて、センシティブな人で、この仕事はだいぶきつかったらしく、しばらく元気をなくしました。

IPSA 大会の方は、2006 年に理事長だった東大の渡辺浩さんが仕切って見事に成功したと思います。

この辺りは学問的な中身をすっ飛ばして駆け足で出来事だけを記述する形になっていて、申し訳ありません。あとで地方自治研究の話をするなかで、いくらか補足します。

私は、このころ 1980 年代以降勉強してきた世界都市論をまとめてみようと思い、『世界都市』（有斐閣、2006 年）を書きました。いま読みなおすと、まことに中途半端な本だった気がします。ただ、インターネットで「世界都市」を検索すると、「ウィキペディア」のページなどが出てきて「世界都市」の定義や概念的な部分はだいたい私の『世界都市』が引用されていますので、一応スタンダードな本にはなったのではないかと思っています。

自治体問題研究所と地方自治学会

加茂）　日本での地方自治との関わりをお話ししておきます。1998 年から

2006年まで私は自治体問題研究所の理事長を務めました。前任者が宮本憲一先生で、あとをやってくれと言われたのでした。自治体問題究所は、自治体職員や住民運動活動家などからなる会員制の研究所で、住民運動や自治体労働組合などを主な対象に『住民と自治』という機関誌や図書を発行したり、研究集会やセミナーを開催したりしていました。その理事長を島恭彦先生や宮本先生が長く務められたので、私には荷の重い役職でしたが、宮本先生に言われたのでは仕方ないと思い、引き受けました。

私が理事長を務めた時期は、地方分権と平成の市町合併が自治体をめぐる大きな争点になっていた時期でしたので、やたらに忙しく、書くべきことは無数にあり、とても書き切れません。日本の地方分権改革は1980年代から引き継がれた問題で、もともとは第二次臨時行政調査会（土光敏夫会長）が「増税なき財政再建」のために地方自治体の歳出を抑制しようとしたことに端を発します。歳出抑制のために、国庫補助金の削減、自治体職員の給与・人員抑制、保育料など公共料金の引き上げをはじめとする、国による地方行財政の統制、行財政の中央集権化が進みました。単に地方に対する中央の行財政的統制が強まっただけではなく、経済的・社会的な活動の東京圏集中がこれに重なり合いました。70年代に製造業の成長が止まり、脱工業化・情報化・サービス経済化が進むとともに、地方の工業都市の経済活動が衰退し、東京などの大都市圏には、ニューヨークで法人本社複合体（Corporate Headquarter Complex）と呼ばれたような企業の中枢機能と結びついた金融・保険・会計・法務・情報・サービスなどの経済活動が集積しました。東京一極集中というのは、こういう行政・経済・政治の中枢機能が重なり合って東京に集中したことによって生じた現象でした。戦後の日本政治は自民党一党優位制の下で、国会・内閣・省庁・政権党だけでなく、審議会、諮問機関、懇談会、研究会など、政官財界人たちの半ばインフォーマルな政策ネットワークを通して政策調整や決定が行われていたので、このネットワークへのアクセスが重要な政治・経済資源でした。80年代以降の東京一極集中によっ

て、このネットワークへのアクセス動機はいっそう強まりました。もともと日本では重要なことは少数の人が、フェイス・トウ・フェイスで話し合って決める習慣があったため、政治的にも経済的にもこの「フェイス・トウ・フェイス・ネットワーク」にアクセスできるかどうかで、得られる情報やチャンスの値打ちが違ったのです。このことが、人、組織、カネ・情報の東京への集積を途方もなく進めたのではないかと思います。野心を持った企業や個人は東京にアクセスポイントを持とうとし、その結果、企業や人も東京に集中したのではないでしょうか。こういうメカニズムを私は、「調整・ネットワーク型集権」とか「日本型集権システム」と呼びました（『日本型政治システム』有斐閣、1993 年）。いずれにしても、この結果、東京の地価は高騰し、普通のサラリーマンは都心周辺に家を持って住むことが難しくなり、東京は単身者の街になり、共働きの家族持ちは都心から 1 時間半とか 2 時間もかかる所に住むほかなくなりました。映画『男はつらいよ』に、寅さんが東京都心の証券会社に勤める証券マンと知り合って茨城県牛久の彼の家まで同行して泊めてもらうのだけれども、この証券マンが長時間の通勤と仕事に疲れ果てて蒸発してしまい、寅さんが証券マンの奥さんであるマドンナ、大原麗子と一緒に探し回るという話が出てきます（『男はつらいよ　寅次郎真実一路』）。またその頃読んだ新聞記事に、関西圏でも人口が増え地価が上がって、大阪の都心で働くサラリーマンの多くが三重県の名張近辺に家を買って住む。夜 9 時頃に大阪の難波を出る最終の近鉄特急にそういう勤め人が大勢乗り込み、車内で飲み会をやっている。電車の揺れで酔いがうまく回って快い、というような話が紹介されていました（笑）。このように遠距離通勤で共働きの家庭だったりすると、子供を何人も持つことは不可能です。こうして東京圏や大阪圏での出生率が下がり、1990 年には合計特殊出生率が 1.57 まで落ち込むいわゆる「1.57 ショック」が起こったわけです。「東京一極集中」あるいは「トーキョー・プロブレム」が、一躍日本の最大の社会問題としてクローズアップされました。

1990年に設置された第三次行政改革推進審議会では、細川護熙氏ら地方分権論者が委員に入って分権改革の方向を打ち出し、93年政変での細川政権の成立、95年の地方分権推進法の成立を経て、同年地方分権推進委員会が設けられ五次にわたる答申を出したのでした。官僚・分権推進委員・自治体関係者・研究者などの意見がぶつかり合い混迷しましたが、結局、機関委任事務の廃止を含む分権改革が方向づけられました。ところが、経済界や自民党からは、分権をするのならその受け皿となれるような体力があって効率の良い基礎自治体が必要であり、そのためには市町村合併が不可欠だという意見が俄然強くなって、市町村合併に争点が移っていきました。

1998年、私が自治体問題研究所の理事長になった頃に自自公、政府与党三党の政策合意で、市町村の数を当面は1,000に、やがては300まで減らすという方針が出て、自治体は大騒ぎになりました。自治体問題研究所にもこの問題で講演や調査の依頼が持ち込まれ、私も北海道から熊本まで、1年に60から70回も講演やシンポジウムに駆け巡りました。合併推進論の学者や総務省から出向していた府県の市町村課長とディベートをやりました。この過程で西尾勝さんが、2002年11月に、地方制度調査会の副会長として、合併推進の方向で「西尾私案」を提示したため、私は尊敬する行政学者だった西尾さんの案を、何度も批判する羽目になりました。

とにかく大騒ぎが何年も続きましたが、私は2003年に、小規模自治体の首長さんなどと一緒に「小さくても輝く自治体フォーラム」というイベントを立ち上げました。2002年秋、市町村合併を強行できる法制度がつくられそうな雰囲気が強まっていた頃に開かれた自治体問題研究所のシンポジウムでの、長野県栄村の高橋彦芳村長の発言をきっかけに実現したイベントでした。自治体問題研究所が事務局を引き受け、全国の小規模自治体がフォーラムをつくって声を挙げたのです。2003年2月22日、豪雪の信越国境にある栄村に全国から小規模自治体の関係者が600人も集まって、このフォーラムを開催したのです。事務局役を務めたわれわれ自治体問題研究所のメンバー

も予想しなかった大きな集会になり、メディアにも注目され、大きく取り上げられて、合併の流れに小さからぬインパクトを与えました（自治体問題研究所編『ここに自治の灯をともして』自治体研究社）。これは現在も続いている運動で、たぶん私が自治体問題研究所の理事長として行った最も重要な社会活動だったと思っています。結局市町村合併は、基礎自治体の数を 3,200 から 1,700 台まで減らしましたが、1,000 にまでは達しませんでした。ただ、いまは人口減少が急速に進んだため、より大掛かりな地方再編の構想も出てきているようで、日本の地方自治がどうなっていくのか先は見えません。

ヨーロッパ自治体調査

加茂）　平成の合併が進んでいた頃、私はヨーロッパ各国で、自治体と自治体間関係の変化について現地調査を試みました。市町村合併を考えるには、自治体の人口や面積の規模のあり方についての理論的な基準・根拠が必要ですが、その頃の私はそういうことを考えたことがなく、「ケース・バイ・ケース」で良いのではないか、と思っていました。ただ、小さな自治体の首長や議員の多くは、自分の村や町を故郷として大切に思っており、簡単になくされてはたまらない。特に中山間地や離島では自治体の規模を大きくすることは必ずしも効率化にはならないと考えて、合併政策に強く反対していました。そこで自治体の合併や統合、境界線の変更についての国際的な準則がないかと探したところ、「ヨーロッパ地方自治憲章」（1987 年）という文献が見つかりました。そこには公共サービスは、住民に一番近い地方政府がまず優先的に行い、小さい自治体で提供できない事務は大きな政府が補完するという「補完性の原則」や、自治体の合併や分割など自治体の境界線の変更は、関係する自治体の合意によらなければならないという「自己決定」のルールが明記されていました。つまり、国などが無理矢理に自治体の再編成をさせることを認めないというのが、ヨーロッパでの地方自治の共通原則だったの

です。

半面、現実の動きとしては、北欧、ドイツ、イギリスなどでは1970年代以降、大規模な自治体合併が行われ自治体の数が8割も減っている国があり、他方アメリカ、フランス、イタリア、スイスなどでは自治体の数がほとんど減っていないか、かえって増えていました。現実の自治体の動きは、自治体の拡大と維持または縮小が入り混じっていたのです。

その理由はこういうことではなかったかと思います。すなわち、技術とくに交通通信手段の進歩による生活圏、行政圏の拡大、高齢化による福祉など公共サービスの需要の増大、グローバル化による人や企業の行動範囲の拡大などは自治体の規模の拡大を促し、逆に同じ少子高齢化などがもたらす介護、地域医療、保育、コミュニティ計画などの需要は、住民に近接した活動やサービスの単位を必要とします。そういうわけで、一方に自治体の規模の拡大、他方に小規模な自治単位の形成という一見正反対の変化が生まれている。どっちを基本と考えるかで自治体再編成の方向が違ったのです。言い換えれば、公共・統治空間が多層化・多様化して入り組み、何が基礎的な自治の単位なのかがわかりにくくなってきたのだと思います。

2004年から2009年にかけて、フランス、ドイツ、フィンランド、デンマーク、イタリアなどを回って調査してみました。その経緯は『自治体間連携の国際比較』（ミネルヴァ書房、2010年）という本に書きました。稲継さんを代表にして行った科研の共同研究の成果が主な内容でしたが、私が単独でやった調査もありました。フィンランドではかつてハイラさんのアレンジで知り合った湖水地方のタンペレ大学の行政学部の援助を得て、自治体や自治体組合を訪問しました。森と湖が延々と続く湖水地方で多くの自治体や自治体組合を訪ねました。「森と湖」というのはロマンチックに聞こえるのですが、どこまでいっても森と湖となるとちょっと違う（笑）。飽きて眠ってしまうほどでした。押しなべて人々は自分の村や町（フィンランド語で「クンタ」）に強い愛着をもちつつ、人口の減少による行財政資源の減少に困り果

てていました。学校組合や医療組合で仕事の共同化を図っていましたが、それにも限界がありそうでした。フランスでは朝日新聞パリ支局のスタッフのお世話で、ミッテラン政権の首相だったピエール・モーロアさんの話を聞くことが話をできました。モーロアさんは、フランスの「コミューン」はナポレオンの時代から2世紀続いているもので、人々の生活様式・生活感覚に根を下ろしており、そう簡単には変えられないだろうと言われました。フランス南端に近いアキテーヌ州の人口400人余りのクチュール村にも行きましたが、ここでは日本でいえば自治会の会館みたいな小さな建物に、村長、村会議員、職員などに集まってもらって通訳を交えて話を聞きました。アレクサンドル・デュマの『三銃士』に出てくるダルタニアンがこの村を通ってパリに行ったんだよ、という話を聞き、「エー、ダルタニアンは実在の人物だったの」と驚きました（笑）。ドイツでは、当時ドイツに留学していた専修大学の行政法学者である白藤博行さんに車を運転してもらってメルヘン街道からハノーバー、ブレーメンを旅しました。デンマークでは、ロスキレ大学のヤコブ・トルフィング教授から資料をいただき、話を伺いました。

いずれにしても、北ヨーロッパの人たちは、福祉国家的な公共サービス供給体制を確保することを重視して、自治体の規模拡大に傾いており、フランスなど南欧の自治体では、地方自治のキーワードは住民同士、住民と自治体との「近接性」（proximity）であるとされていました。「合併」（フュージョン）は禁句だとまで言われました。要するに、自治体の拡大志向と小規模維持志向とは、地域の歴史と交錯しており、論理で片のつく問題ではなさそうだったのです。

また話が前後しますが、1987年に地方自治学会ができました。先ほど述べた第二臨調の改革で中央集権が強まったことに対する危機感から、宮本先生、柴田先生や佐藤竺先生などが提唱してつくられた学会でした。水口さんが長い間事務局長を務め、私はお付き合い程度でしたが、どうしたことか2000年から2002年まで、私が理事長を務める羽目になりました。こうして、

地方自治論が私の三つ目の研究分野ということになったのです。

加藤） ありがとうございました。大阪市立大学でのお話から始まって、「自治体問題研究所」でのお話、とくに「市町村合併」の流れのなかで、地方自治体の人たちとの関わりなどについてもお話いただきました。言い換えれば、加茂先生の 40 代から 50 代にかけてのご研究・仕事についてになるかと思います。

新川） 政治学会の理事長を引き受けられて、加茂先生の時にある意味、いろいろな修繕をしなければいけなかったと思うわけですが、稲継さんが事務的なことを引き受けて、政治的なことは先生がかなり引き受けざるをえなかったという感じですか？

加茂） それはそうですね。あの当時の政治学会はなかなか難しかったです。それまで理事選は 10 名連記で投票して大きな規模の大学が集まると、理事ポストがたくさん独占できたわけですけど、それはやめようというので、いまは確か 3 名連記だったと思います。そうすると、どこかに票や理事ポストが集中することがないので、そうしましょうとしたんですね。

加藤） 私は当時まだ大学院生で、この件について全く知りませんでした。のちに、政治学会でもそういう大変な時代があったということを、人づてに聞きました。その修復をご担当になった加茂先生のお話から、やはり大変だったんだな、と今日のお話であらためてよくわかりました。

徳久） 事務局を仕切っておられた稲継先生は飄々とされていて、「君たち（院生）には余計な負担をかけないから安心してくれ」と言われて、「先生、ステキだよね」とみんなで話していました。でも、あの頃、加茂先生に会うたびに先生がくたびれていたので、心配していました。なのに、みんなで駅近くの居酒屋・雪国に飲みに行くあたりに、先生のサービス精神の高さが垣間見られましたよね。

加藤） 肉体的にも心理的にも相当大変な仕事だったんだなと、よくわかり

ました。市大の先生方の移り変わりの話についての質問です。政治学の教員ポストは限られていたと思いますが、そのポストのなかで、人員の配置についてはどのようにお考えでしたか？時代にあった配置を考えるというか、工夫していたことや気を付けていたことはありますか？真渕先生、大西先生は政治学、行政学で、その当時の王道に近いところにおられたと思いますが、稲継先生は違うタイプの研究者のように思いますが、その意図は何かあったのでしょうか？

新川）　村松シューレということは言えますけどね。

徳久）　真渕先生、大西先生、稲継先生は村松岐夫先生の門下ですね。

加茂）　あの時は村松シューレ云々ということはあまり頭にはなかったですね。属人主義的な人間の好みで「こいつとならやっていけるだろう」という感じでやっていたような感はあります。学会の理事長も「均衡人事」とかいう発想が、それまではあったんですね。一期東京がやって、次は東京以外からという形で理事長を出すのがルールみたいになっていた。

新川）　あの時は一番大変だった理事長だったのではないかと。加茂先生のお人柄でうまくいったというか、先生にはお気の毒だったと思いますが。そういう印象はありますね。

加藤）　個人的には、大阪市大は　優秀な先生方を採っているという印象があります。どういう観点で人事を考えておられたのかなと。「人で見ている」というのは参考になりましたが、何かその他にも気をつけられていた点はありましたか？

徳久）　傍観者としての印象ですが、先生は若手教員を育てるのがとても上手でした。先生は、学内雑事はご自身で引き受けて、30代の先生たちには「とりあえず研究しなさい」と言い続け、研究業績を発信するための助言も惜しまなかったという姿勢が、院生であった私にも印象的でした。ちなみに、先生は政治部門の構成、具体的には、政治史と政治学の均衡などを念頭に置いて、戦略的に人事を進められていたのですか？

加茂）　どうだったっかなあ。あの頃は次から次に辞めていく人が出てきたので、その後を埋めるのに安易なやり方をしたくないというので「その分野でこれは」という優秀な研究者を紹介してくださいと要所、要所にお願いしてリストアップしてチラチラ、論文を読んでみて決めていったというのが実際のプロセスではあったと思います。

新川）　私も経験がありますけど、中堅大学では人の動きが激しいから、人事ではあまり悠長に構えていられない。「いい人」と思うなら、採らないと採られちゃう。

加茂）　それはありましたね。早くツバをつけようと。

加藤）　優れた人を集められているのは、素晴らしいことだと思います。教員になって人事に携わってみると、そのことがよくわかります。

徳久）　さて、ここで話題を自治体問題研究所に移したいと思います。自治体問題研究所に関わるきっかけは宮本憲一さんだと思いますが、先生が「実務」という面から自治体問題に取り組むようになったのは、いつ頃からでしょうか？もしかすると、行政との関わりをもつよりも以前に、住民団体や住民運動との関わりがあったのかもしれませんね。先生の著作を読むと、都市で糧を得て日常を営む市井の人びとが都市に活力を与えるという信念に似た思いが伝わってきます。市町村合併時に携わった「小さくても輝く自治体フォーラム」なども、地域の人たちの力があって地域社会が回っていくという前提があるように思います。そこで暮らす人々や生活圏を忘れて、行政管理の発想で市町村合併を行なっても、結局、コスト高になる可能性もあるわけです。住民の力を重んじられるという先生の姿勢は、いつ頃から形になり、それが研究や自治体問題研究所の活動にどのようにつながっていったのか。そこをお話くださいますか？

加茂）　黒田了一さんが大阪府知事になったのが1971年だったかな。黒田さんは大阪市大法学部の先生でしたが、あの時期に地方自治体の問題に、かなり本気で動き始めた気がします。堺泉北の調査をしたのと連動してたように

思います。黒田さんが知事になった後、「大阪府環境管理計画」と言われる窒素酸化物や炭素酸化物の排出量の総量規制の政策ができました。黒田さんの周辺にいた環境問題の専門家がプランを提案したわけです、環境政策としては画期的な試みで、固定排出源である工場と移動発生源の自動車の排出量を抑える考え方だった。大阪府のそういう政策が行われている時に、私たちは堺泉北工業地帯の調査の一環で、堺あたりの気管支系の病気をもった患者さんたちとお話をしました。公害被害者の人たちと会ってみると、いろんな感情も出てくるわけで被害者の目線、生活者の目線で地域を見るという感覚は、その時に出てきたように思いますね。当時宮本先生は全国の自治体問題研究所理事長だったんですが、大阪の研究所の副理事長もしておられて、僕に「入ってくれ」と言われたので理事になって参加することにしました。入ってみたら理事の中にはいろんな分野、保育とか教育とかまちづくりとか、さまざまな分野の住民運動のリーダーの人たちがおり、自治体職員の労働組合の幹部もいて、そういう人たちの目線に沿って自治体を見て考えるようになった。

新川）　市町村合併の時に研究姿勢が「社会運動家」的になっていったということでしたが、同じ地域を見る目線が変わったわけですね。変わったんだけども、そこには「都市政治」から「世界都市」を見ているなかで培われてきた「都市政治観」「地域観」「コミュニティ観」というようなもの、哲学として「世界都市から見る視線」があったと言っていいんでしょうか？

加茂）　そうですね。世界都市に文明・文化が集まってきているのを見て面白いと思う感覚と、ジェイコブスがグリニッジ・ビレッジに高速道路を通すことに反対したことに共鳴した感覚が何かつながったんですね。あの地域を歩きまわって話を聞いていくなかで、その両方がわかった気がしたわけです。「世界都市は面白いな」という気持ちと、でもそういうものが出来上がっていく過程には大きなコスト、弊害がありうる。それをどう考えていくのかが、これからの都市論のテーマだろうなと思ったんでしょうね。

新川）　先生のなかで都市空間をデザインするという意識もあるんだけど、「空間の自然性」を大事にするというか、「市町村合併」の時もそうでしょうが、区切り方が地域の特性を無視してメカニカルになることに対しては反対だと。

加茂）　なるほど。国によって都市や自治体の単位の設定が違うんですね。イギリスはロンドンとかバーミンガムみたいな都市をつないでいく発想で「都市圏」(コナーベーション）が発展していくわけですけど、切れ目なしにずるずると都市が広がっていくのは良くないという考え方もあって、だからガーデン・シティ、「田園都市」とか「グリーンベルト」という考え方で、一つの「都市圏」のまとまりを完結させ、その外側にグリーンベルトをつくって次にまたつないでいくという考え方で都市をつくってきたように思う。日本やアメリカの北東部は、とりとめもないほど巨大で、どこからどこまでか区切りかわからないメガロポロスができる。

フランスは、パリ以外はメトロポリタンエリアは小さい。あれは農業の国で、だからこそコミューンの伝統が、なかなか消えていかないのでしょうけども、フランス流の「コミューン」に愛着を持ちながら、しかしちゃんと都市圏をつくって国土を形成していく考え方でまとまりのある固まりを作っている。そういう違いが、どこから出てくるのか、よくわかりませんが、それぞれの国、地域の人たちの考え方、感覚が現れているような気がする。それを理論的に説明することは難しいですね。

新川）　実は世界都市と地方自治の間に段差を感じていたんですが、お話を聞いていて、むしろ「世界都市研究」のなかで、地方自治の問題が反省的に捉え返されていったんだとわかりました。

加藤）　私も、それが気になっていることの一つでした。宮本憲一先生たちとのコンビナート調査から得た、「地域の人たちの生の生活やつながりのなかから社会を捉える」という、先生なりの社会認識の方法・見方が育まれてきて、それが結実した形でできあがっているんだなと、この２日間のお話を

聞いてよくわかりました。腑に落ちたところがあります。

もう一つ伺いたいのは、現実社会とのかかわり、「社会運動」的な活動が先生にもたらしたものについてです。「市町村合併」の動きが強まっていくなかで、現実政治へのコミットメントが先生にも求められた。「政治学者として、現実との緊張感をもちながら、研究に携わるべき」というのが重要であるとおっしゃられていましたが、1990･2000 年代は、それを超えて政治もしくは社会運動をやらざるをえなかったと思いますが、この 10 年、20 年を振り返って、この経験は先生にとって、どのようなものだったのでしょうか？

加茂） あの当時は研究者じゃなかったような気がする。「自治体問題研究所理事長」は単なる研究者ではいられない立場でした。あの頃、小さい町や村の首長や議員、職員たちがわれわれに寄せる期待が大きかったわけで、「合併に心情的には反対だけれども、理屈を教えてくれ」「合併をうっかりやると大変なことになるという論理をちゃんとわれわれに示してくれないか」と、ものすごい熱気を感じたんですね。あの時は研究者としての「職業倫理」は二の次にして渦中に身を投じたというのが正直なところですね。

加藤） 「小さくても輝く自治体フォーラム」が自治体の人たちに与えたものは、勇気づけるものだったと思いますし、人々の心に残るものを着実に提供してきたという面では成果が残され、そして現在にもつながっていることが、素晴らしいと率直に思いました。通常、研究者が現実社会にコミットしていくと、うまくいかないこととか、いざこざを残しがちと思いますが、良い形で現在もつながりが残っているのは素敵なことだと思います。

加茂） 半分、社会運動的な感覚で考えていた。総務省が組織だった取り組みをして雪崩を打つように合併の方向へ流れていく。ドミノみたいなものが起こりつつあったのですけど、逆に、だからこそ合併はそんなに良いものか。合併したらほんとに市町村自治体は効率的に運営ができるようになり、財政的な余裕ができるようになるのか。これらの問いに実証的なデータを示しな

がら、ちゃんと説明していくと、地域のなかで関心をもって考えている住民や首長や議員は、自分自身がコミットしているだけに響くんですね。響くと、「合併のドミノ」が起こっているのと同じような形で「合併しないドミノ」がまた起こってくるという感覚を、あの時はもっていました。研究者の職業倫理よりは市町村合併問題の方が大事だ。立場上からもそれを優先していこうと考えて、全国を飛び回っていましたね。

加藤）　先生のテーマのひとつである「都市の動態」の話と関係しますが、ある動きに対して、拮抗力ともいうべき、それに対抗する動きが出てくる。先生は実際の現実社会の動きのなかで、その一翼を支えていた。これまでの研究のなかで明らかにしてきたことを、現実社会で具現化されていることが、お話を伺ってわかり、興味深かったです。

徳久）　2000年頃から、先生がフランスの「コミューン」について言及される機会が増えたことをよく覚えています。当時は少し驚きましたが、住民のアイデンティティを構成するコミューンへの共感は、「社会運動家」として市町村合併に携わるなかで覚えられたのと同時に、「研究者」として行政圏域のあり方を考える契機となったことで高まったのかもしれませんね。市町村合併から15年経っていますが、先生は「現在」を、どう見ていらっしゃいますか？

加茂）　人口減少を背景に「自治体戦略2040」とかいうのが出てきているようで、基礎自治体よりも「圏域」を主体にし、ディジタル・ネットワークを応用して、地域を運営する考え方が出てきているようです。「人口減少」とか「政府債務の累積」、「コロナ」とか大きな問題が蓄積しているだけに、既存の知識や理論だけを武器にして、これから出てくるかもしれない「新しい地方制度」のあり方について、簡単にものを言えないなという気がしています。コロナは、ある程度事態が落ち着くかもしれないが、人口減少は、ほとんどセキュラートレンドで、どんどん進んでいるけど、どこかでカーブがくる、ターンがくると思っているので、それをある程度予見した上でないと、

これから起こってくる事態について「ああだ、こうだ」と今は言いにくいなという気がしているんですね。

徳久） それでは、話を先に進めましょう。ヨーロッパでの自治体連携の調査報告についてお話しください。

加茂） 欧州評議会が出した「ヨーロッパ地方自治憲章」という文書があって、そこに先に述べた「補完性の原理」と「自己決定のルール」が書いてあった。それが地方自治に関する共通原則として捉えられているんだということがわかりました。

それをバックに、2004年から2009年に現地調査をしました。疎密の差が激しい調査でしたが、とにかくトータルで掴んだ感じとしては、北ヨーロッパの人たちは公共サービスの供給体制を重視して自治体規模の拡大にかなり傾いているが、南欧は小さい自治の単位を維持する考え方が強い。「自治の拡大思考」と「小規模維持思考」とが絡み合っていたわけで、これは地域の歴史と切り離すことはできない。論理ではカタのつかない問題だろうと思いました。フランスなんか400、500人の村で、いくら大きな事務は共同化してやるといっても手間隙がかかりますから大変なので合併した方がいいのかもしれないなという感じがしたのですが、そうはいかない。地域のなかにおける「コミューン」の歴史、ナポレオンの時代以来、2世紀にわたって同じ「コミューン」がずっと続いてきたという歴史をバッサリ切ることはできそうもないという気がしました。

結局ヨーロッパの自治体は「合併、統合」によって改革する方向をとる自治体と、「近接性」を大事に「小規模な自治体」を維持するという動き、3つ目にフィンランドのように、どっちをとるかはその自治体に任せるという考え方と、3つのタイプの「自治体改革」のストーリーが進んでいたのではないかということを『自治体間連携の国際比較』に書きました。

加藤） ヨーロッパ各国を調査してみたことで得られた知見や肌感覚は、先生に、どういうものを付け加えることになりましたか？

加茂）　フィンランドでは「コミューン」のことを「クンタ」と呼びます。「クンタ・リットー」という日本の全国町村会のような団体がありますが、その事務所にいって話を聴かせてもらったのですが、フィンランドの自治体は、これまではフランス的な考え方で小さなコミューン、クンタを大事にしていこうという考え方だったが、それではカタがつかない。人口がヘルシンキ、エスポ、タンペレといった都市圏に集中して田舎はどんどん人がいなくなっている。北のラップランドも人が少なくなっている。公共サービスを成り立たせること自体、難しい。これまではコミューン主義では考えてきたがうまくいかなくなったので、政府もクンタ・リットーも、合併を含めた改革を決断したというのですね。私はちょうどその変わり目の時にフィンランドの調査をしたわけで、ちょっと衝撃的でした。

フランスでは最初にピエール・モーロワという元総理大臣の話を聞きました。「フランス人はコミューンに対する愛着、拠り所にしてフランス革命以来、2 世紀やってきた国である。フランスは、そう簡単にコミューン主義から脱却しないだろう」と言われて、そんなものかなと思った。実際にフランスの自治体が困っていないわけではない。問題を抱えているにもかかわらず、フランスはコミューンの国だと言っていたことが印象的でした。

加藤）　北欧のように「効率性」を重視することで「合併・統合路線」に向かうところと、フランスのように「近接性」を重視する国がある。歴史が色濃く反映され、その積み重ねが重要であるということですが、それを踏まえて日本はどのように進んでいくべきとお考えでしょうか？

加茂）「経路依存性」(パスディペンデンシー）をどう考えるかですね。「西尾私案」では西尾さんは、日本は行政村伝統の国だと言っています。明治憲法がつくられる前夜に大規模な「町村合併」をやった。「昭和の合併」では、15,000 くらい残っていた市町村を 3,300 まで減らした。日本における「自治体の再編成」は「行政村伝統」で、時代が進み、生活圏、行政圏が拡大していくにしたがって、自治体の区域を拡大する方向でやってきた。だから「昭

和の合併」以来半世紀経ったいま、新しい自治体再編成をやってもおかしくないという意味のことを言っておられる。それが私には疑問だったんですね。今はむしろ「自然村」とまで言うつもりはないけれど、より狭域の地域での公共サービスが必要とされるようになってきている時期ではないかと思った。

徳久）「西尾私案」では、「明治の大合併」は小学校の事務処理、「昭和の大合併」は中学校事務の処理を目的に行われたのであり、平成においては、拡大してきた生活圏や経済圏を基礎として、基礎的自治体の再編を行なうべきことが謳われました。行政事務の観点からはそう言えますが、住民調査などをすると、地域住民が親近感を抱き、関与する単位は、小学校区であることが多い。にもかかわらず、それを軽視するのは、少し違うなと感じます。無機的に考えれば、基礎自治体を拡大すれば、中間的な単位である都道府県は小さすぎることになり、道州制に発展する。他方で、住民の暮らしを支える公共サービスを誰がどのように負担するかを考えると異なる単位が出てくるかもしれない。行政単位の問題は、公共サービスをどのように提供するか、そのためにどのような政府間関係が望ましいかを念頭に置いて議論しなければならないように思います。先生はいかがお考えですか？

加茂）　フランスはいま、「コミューン」があって「コミューン連合」やコミューン組合があり、その上に県があり、「レジオン」（州）があって国があり、事実上「4 層制」になっている。「フランスはミルフィーユみたいでおいしいかもしれないが、複雑すぎてわからない」という意見もあると聞きましたけど、ミルフィーユでややこしいが、ややこしいものを使いながら、フランス人はそれなりに生活しているのかなと思いました。ただそのなかで近年重視されるようになっているのが、コミューン連合です。「コミューン連合」（コミュノテ・ドウ・コミューン。「コミューン共同体」とも言う）を国の全域に行き渡らせるというのが、サルコジ時代の政策だったと聞いています。「コミューン連合」が、結構、基礎自治体的な役割を果たし始めている。こ

れまでの「コミューン」は規模が大きいものもあるが、平均人口 1,000 人ですから、コミューンは日本の地域に置き換えれば「字」とか「区」ということなので、ある程度まとまったパッケージで住民もまとまり、公共サービスも提供することができるのは「コミューン連合」になっているのではないかという印象をもちました。

「昭和の合併」は、小学校区の上に中学校区をおいて、中学校区が小学校区ではやれない、ある程度、広域的な住民のまとまりをつくることを狙いにした。でも基本は小学校区ですね。小学校区が日本の地域の公共サービスや、まとまりの一番基本になっていて、それは今もあまり変わっていない。

加藤）　歴史から切り離して現実を切りとることは、イーストンの「政治システム論」とかパーソンズの「社会システム論」などのモデルとして大事なところで、だからこそ面白いし、意味がある。しかし、現実社会を動かす際には、歴史や文脈を切ることには怖さというか暴力的な側面がある。無自覚にやるのは危険というか、よろしくないということもわかりました。それがあるからこそ、先生の「システム論」に対する批判の根底にあるメッセージは、地方自治研究にも活かされており、現在もなお価値があるように思いました。この視点は、加茂先生のご研究に通底しているものの一つなんだろうなと感じます。そして、堺泉北の調査研究や（世界）都市研究や地方自治体研究を通じて、「そこに生きる人びとの生の声」や「自治」の大切さに早い段階で気付き、それもまた後の研究に通底しているものだと思いました。「歴史性や文脈の重要性」、「そこに生きる人の主体性の重要性」といった視点は、対象を変えながらも、先生の研究のなかに生きていることが今日のお話でよくわかりました。まだお聞きしたいところですが、今日はこれでおしまいということにしましょう。

立命館大学への異動と公務研究

加茂） 2007年、私は大阪市大での定年を迎える前年に、立命館大学が新たに設置する公務研究科という大学院の専任教授として招かれ転任しました。一種の公共政策大学院でしたが、先に立命館に移っていた水口さんたちが招いてくれたのです。修士課程だけの独立研究科、プロフェッショナル・スクールでしたが、定年70歳というありがたい条件で、大学勤めを続けられることになりました。京都に単身赴任することになり、JR二条駅前の朱雀キャンパスに研究室をもらったのですが、行ってみたら「鹿鳴館みたい」と言ってみたくなるような瀟洒な建物で、一緒にきたカミさんなどは「お父さん、初めて大学らしいところへ勤められるね」と喜んでました。大阪市大はよほど殺風景に見えていたようです（笑）。学部を持たない職業人育成の独立研究科というのは未知の世界でしたが、みんなで議論しながらつくっていくしかないと覚悟を決め、水口研究科長のもとで、私がカリキュラム案をつくってスタートしたのです。正直言って五里霧中でしたが、公務員志望の学生や現役の公務員が集まって、午後から夜9時過ぎまで勉強し、大変活気がありました。立命館の学生は、真面目で向学心があって好感が持て、教えるには自分も勉強しなければならないと思いました。といっても法学研究科ではないので、政治学ではなく、公共政策論や政策過程論、のちには公共哲学を講義することになりました。それらの分野で論文を書くことはなかったものの、結構、講義の準備のために勉強しました。公務をめざす人たちには、公共政策に関するテクニカルな知識だけでなく、「公共性」とか「正義」、「使命」を考える哲学的なマインドも必要だというのが水口研究科長の考えで、私もそれには賛成でしたので、公共哲学をコア科目にし、行きがかり上、私が講義しました。公私未分離の原始氏族社会から出発して、どのように公共的世界が成り立ち、それがどのように公共としての形、存在理由・正当性を確立・発展させていったのかを話し、最後はジョン・ロールズの『正義論』

やロバート・ノージックの『アナーキー・国家・ユートピア』、マイケル・サンデルの『公共哲学』など、現代の政治哲学につないでいったのです。ロールズなどが、公共や正義という非経験科学的な概念を論じながら、社会契約のようなフィクションによらず、論理的推論を積み重ねていくのが面白くて、つい興に乗って話していたのですが、学生にとって面白かったかどうかはわかりません。サンデルのコミュニタリアリズムやジェイムズ・フィシュキンらの「熟議デモクラシー」の話はわかってくれたようですが、現実的な妥当性については納得できなかった人が多かったようです。

プロフェッショナル・スクールなので、実務家にもティーチング・スタッフに加わっていただくということで、人事院をはじめ中央省庁からも人を派遣してもらいました。研究者・実務家が一緒になり、複数教員でゼミを担当する科目もあり、お互いにいろいろ学ぶところがありましたが、テーマやテキストの選び方、議論の仕方などでカルチャー・ギャップ、波長が合わないこともあって、お互いに違和感を持ち合ったり、遠慮し合ったりしながら試行錯誤で授業をしました。院生は当然公務員志望の人が多く、修了生の４分の３が公務員になりました。これは実務家教員から学ぶところが多かったのだと思います。ただ大学院である以上それなりの学問的な水準も要求しましたので、両方を充足するのは大変だったと思います。社会人、現役の公務員や自治体の元首長もおり、出身学部も多様でしたので、議論の波長を合わせるのは大変でした。学生の能力も玉石混淆で、博士課程に進学して研究者になったらいいと思う人もいましたし、有り体に言えば学部での就活に失敗して、やむなく公務研究科にきたようにみえる人もいました。ただ私は赴任した当初から出来不出来は別にして、立命館の院生は生真面目で向学心があり、昔ながらの学生気質を持っていると感じていましたので、できるだけ良いところを評価して伸ばすことに心掛けましたので、大甘の教員に見えたのではないかと思います。

新しい大学院になじむことに気を取られるあまり、研究の方は身体が不自

由になったせいもあって政治学にせよ都市研究にせよ、意欲やエネルギーが枯渇気味になりましたが、科研費や大学の研究旅費を使って海外調査などは細々と続けました。科研の共同研究の成果として前述の『自治体間連携の国際比較』（ミネルヴァ書房、2010 年）、『縮小都市の政治学』（岩波書店、2016 年）などを発表しました。後者の方は、私が研究代表になって申請し、待鳥聡史さん、曽我謙悟さん、砂原庸介さんらこれまで面識のなかった政治学・行政学の中堅の俊秀にも加わってもらって始めた研究でしたが、研究代表である私が体を壊して、後半は徳久さんにまとめ役をしてもらいました。縮小都市研究の手始めに行ったボルチモア、デュイスブルグ、ルアーブルなど、欧米の港湾都市の調査の過程で腰を傷め、帰国後に脊椎炎を発症して、入院・手術・自宅療養 8 か月という羽目になってしまったのです。調査の後半では、私はベッドの上で、メールでアポイントの取り付けなどをやっていただけでした。

人生を分けた病気

加茂）　体を壊した理由はただただ不摂生です。単身赴任で京都生活をするにあたって、京都らしいところに住みたいと思い、知恩院下の祇園白川のほとりに住んで、年甲斐もなく無軌道な暮らしをしました。白川を渡って東大路を越えるとそこはもう祇園の真っ只中、仕事を終えて夜中の 2 時頃にふらっと出かけると、朝までやっている居酒屋や中華料理屋があって、時々明け方まで飲みながら、マスターや顔見知りの常連さんとおしゃべりしました。明け方に家に帰って一眠りする。9 時頃起きて、知恩院から円山公園、高台寺あたりとか、南禅寺、無鄰菴、平安神宮のあたりを散歩し、午後から大学に出ていく。贅沢で不規則な生活をして悦に入っていました。カミさんの方も大阪で「亭主元気で留守」（笑）の生活を満喫していて、二人とも楽しい日々を過ごしていたわけです。でもそれは不健康な生活でもあり、その

報いか、11年の秋に私がボルチモアの調査から帰ってきたら、留守中にカミさんが激しい眩暈に襲われて、緊急入院しており、翌12年には私の方が脊椎炎で手術入院ということになりました。

私の病気は深刻で、一時は大学に復帰できるかどうか危ぶまれました。手術で執刀してくれたドクターからは、「元の生活に戻ろうと思わず、新しい人生を考えてください」と言われて、ガックリしました。実際に腰が曲がって長時間立っていることができず、歩行も困難になったので、普通に大学に通い、普通に授業するのは無理でした。そこで座位で授業ができるよう、パワーポイントを使うことを考え、スライドをいっぱい作りました。13年4月に授業に戻り、なんとか定年まで授業をし、定年後も非常勤で講義をさせてもらいました。都市研究やニューヨーク研究などでいくつか出版の計画も考えていましたが、なにしろ長時間間のデスクワークができず、図書館や書店を回るような行動ができなくなったため、研究計画はこのぶんでは果たせそうにありません。この間、政治学の動向はほとんど見ておらず、年報政治学もじっくり読んでいなかったのですが、最近2019年の年報「主権はいま」とか「成熟社会の民主政治」を少し読んで、政治学も懐かしくなりました。

2017年には『地方自治の再発見』(自治体研究社)という本を出しました。これは私の頭のリハビリのために書いたような本でしたが、キーワードは、「何が起こるかわからない時代」でした。北朝鮮の核・ミサイル開発、アメリカでのトランプ政権の登場、イギリスのEU離脱、ギリシャ通貨危機、ロシアのクリミア併合、中国の南沙諸島進出、世界中でのテロの横行などに私は強い危機感というか恐怖感を持ちました。おかしなもので、身動きがとれずソファに座っているだけの自分の無力さがことさら不安や危機感を募らせたのだと思います。ナショナリズムや排外主義の雰囲気が世界を覆い、第一次大戦の時のように突発的な事件をきっかけに戦争が起こりかねない危うさを感じましたし、東日本大震災や地球温暖化による異常気象、自然災害の頻発を見て、世界は予測不能な「リスク社会」になっているのではないか

という気がしたので、そのことを書きたいと思ったのです。「炭鉱のカナリア」みたいに、人一倍危険に敏感になっていたのだと思います。ただ、「何がおこっても」と言ったときに感染症のことまで想定していなかったのは、知識と想像力の欠如というほかありませんでした。いずれにしても、このリスク社会を生み出した要因の一つは、グローバル化による人やマネーの移動がもたらした社会の不安定化でもあると思い、従来の枠をこえた地域空間の自治・ガバナンス・システムが発見される必要があると考えて、「地方自治の再発見」と言ってみたのです。まったく私の頭の空回りで、それに読者を付き合わせてしまったようなものでした。

加藤）　それでは質疑応答に移りたいと思います。「公務研究科」のカリキュラム案を加茂先生がつくられたことについてです。「2年制の職業人養成の大学院をつくる」、対象としては「公務員を目指す学生」と、「実際に働く人たちのキャリアアップ」。このように設定した際に、カリキュラムの組み方として先生と水口先生が注目されたのは公共哲学を大事にしようということだったそうですが、その背景には何があったのでしょうか？どういう経緯で「公共哲学」に注目しようと思われたのですか？

加茂）　多くの大学の「公共政策大学院」のカリキュラムを眺めてみると、実際に公務の現場で政策をつくったり修正したりするためのテクニィカルな技術や理論を教えている大学院が多いように見えた。ところがそういう科目を一揃えして提供するには人がいるんです。立命館の場合、すでに政策科学部があり、同じようなことをやっている人たちもいたので、公務研究科という独立研究科で全部満たすことはできない。実際には政策科学部や法学部の人たちにも講義してもらう形でやっていたんですが、おのずからリソースの限定がおかれていた大学院だったので特色を付けるためにどんなことをしたらいいかと考えて、水口さんが、公務員になろうという人たちに使命感、倫理感とかいった哲学な的マインドをつけないといかん、公共哲学を一番中

心的なコアの科目に置こうと言い出して、そのことを前提にカリキュラムをつくったわけです。

新川）　専門職大学院は設置基準上、学生数に対する教員数、カリキュラムも縛りが結構きついと思うんですが、1学科の定員はどれくらいだったんですか、学生は公務員志望が中心ですか？

加茂）　設置基準でいう、いわゆる「専門職大学院」ではありませんでした。もう少し緩やかな「プロフェッショナル・スクール」。学年定員が60人でしたが60人を満たしたことは一回もない。多かった時で45人くらい。国家公務員Ⅰ種（現･総合職）の試験に合格して公務員になった人は累計で3、4人くらいかな。府県の公務員をめざす人が多かった。大阪府、京都府や滋賀県とか近隣の自治体からやってくる人が多かったためだと思います。

新川）　加茂先生と水口先生は政治学系の教員で、ほかに人事院から実務家教員がきたということでしたが、教員のバランス、科目提供で「経済学」「経営学」とかのバランスはどういう形に。

加茂）　公務員試験に合格するために必要な程度のマクロ経済学とかミクロ経済学、民法や行政法をちゃんと置いていました。

徳久）　公務研究科は、既存の研究科から定員を切り出して設立したという経緯もあり、経済学研究科、政策科学研究科、法学研究科から所属教員が兼担教員として派遣されました。そのことが、公務員試験科目においても欠かせない法律学や経済学、政治学に関する科目の設置を可能にしたと言えます。

加藤）　加茂先生や水口先生は､「公共哲学」をカリキュラムのコアに置かれ、院生たちに学んでほしい、専門人として身につけて社会に出ていってほしいという期待があったと思いますが、先生たちの実践として実際にやってみていかがでしたか？

加茂）　最初の5年くらいは、うまくいっていたと思います。しかし、民間の求人が増えて新卒者が民間に流れて公務にこなくなった時期があって、そ

のために公務研究科の受験生も減る、かなり無理に入れて、定員の半分くらいになる時期が続いていたと思います。その時に手を打たなかったことが、公務研究科が廃止される原因になった。あの当時、京大でも公共政策大学院の定数が30人かな。ところが立命館の公務研究科は60人で。早く定数を変えて30人くらいにしておけば潰れなくて済んだかもしれない。改革を怠っていたものだから定員充足率が一人歩きして、だめだとなって廃止されたということですね。

新川）「公共哲学」で一つはロールズとかサンデルとかいった「正義論」の流れと、もう一つ、宮本憲一先生などの「政策哲学」の原論的なものとがあると思うんですが、これらはどなたが担当されていたのですか？加茂先生は「政策学の基礎」とかも講義されていたのですか？

加茂）　宮本先生の『公共政策のすすめ』（有斐閣）という本のことですね。

新川）　基本的な、原論だったと思いますが。

加茂）　そうだと思います。僕もはじめは「公共政策論」をやっていまして、「政策過程論」にもっていくようなパターンの授業をしました。宮本先生の『公共政策のすすめ』と、かなり重なっていたと思います。

加藤）　少し話を進めます。グローバル化して「リスク社会」になり、社会が不安定になっていく状況のなかで、安定的な生き方、社会を考える時、加茂先生が手がかりにしたかったのは地方自治ということですか？

加茂）　むりやりくっつけたところもありますが。

加藤）『地方自治の再発見』で再発見された地方自治のイメージは、加茂先生が90年代以降に現実社会との関わりのなかで実際に触れられてきた「地方自治」のあり方と大きな変化があるのでしょう

か？先生が「あるべき」自治のあり方として理想だと考えるものはどのようなものでしょうか？

加茂）　それがちゃんと書ければいうことはなかったんですが、ぼんやりした状態の中で書いたわけです。「ネイション・ステイト」があり、そのもとに地方が置かれて、相対的な自治をモチーフにした仕組みが、近代的な地方自治ですね。その近代的地方自治の仕組みが、うまくいかなくなった。EUは国家連合より凝集性の高い政治団体だと思いますが、そういう団体ができ、EU域内で新しい地域ガバナンスの仕組みが出てきますよね。ベネルクス各国などはそもそも小さな国ですから経済圏、社会圏そのものが国境を超えていて、国境を越えて通勤する人も多かったわけですね。それで国境を超えた地域連合ができてくるんですが、近年は言語圏間の軋轢も出てきている。そんなことが頭にあって近代的地方自治とグローバル化時代の地方自治は違う形になるのではないだろうかといろいろ論じてみたかと思います。

加藤）　ありがとうございました。午前中は、ここまでとさせていただきます。

私が生きた「時代」

加茂）　話も終わりに近づいてきました。このあたりで、私が生きた「時代」について巨視的に考えるような話をさせていただきます。中島みゆきに「時代」という歌があります。「めぐる、めぐるよ、時代はめぐる」という歌ですが、あそこでいう「時代」は、個人の人生のなかでの時代、巡り巡り、回り回る人生の一コマ一コマだと思うのですが、私がここで言いたい「時代」というのは、いってみれば社会や歴史の「コンテキスト」、ある時期に起こったさまざまな事象や出来事全体の特徴・相（phase）としての「時代」のことです。私が主にやってきた都市研究や地域研究は、いってみればメゾ・レベルやミクロ・レベルでの政治社会を分析する研究だったのですが、オーラ

ル・ヒストリーの最後に、自分が生きた「時代」を大きな視野から考えなおしておきたいという気になりました。

近ごろはやや下火になっていますが、コンテキストとしての「時代」というと一時「モダン」と「ポスト・モダン」のことがよく論じられましたが、「ポスト・モダン」が多義的で概念的なため、最近のように激しく混迷した時代を論じるのに向かないのか、あまり論じられなくなっている気がします。あるいはそういうカオス的な時代相そのものが「ポスト・モダン」なのかもしれませんが、ここではもう少し社会経済的な実体をもった「時代」を、考えたいと思います。モダン、つまり近代のなかで移り変わり、変転した時代相に沿って考えてみます。

19 世紀後半の第二次産業革命によって生み出された電気・鉄鋼・石油・化学などの技術や産業の時代は、アメリカでは「金ピカ時代」とも呼ばれました。自由競争経済のもとで、ロックフェラーやモルガン、カーネギーみたいな大金持ちが出てくる一方、勤労者は農業では食えなくなって都会に移動し、家族全員が狭いアパートに住み子供から年寄りまでみんな働いてやっと暮らすのですが、不況になったらいつ解雇されるかわからない。そういう貧富・階級の大きな格差を持った時代でした。20 世紀になって自動車、電機や公共事業などの労働集約的産業が生まれ、ニューディールのもとでの社会保障・公教育、公的福祉などの普及などもあって、中流層の多い、所得格差の比較的小さい社会に変貌する。ところが、石油ショックの頃から製造業の雇用が減り、労働者・労働組合も減って、マイクロエレクトロニクスの応用によって労働節約的な産業が広がり、パソコンやスマホ、クレジットカードやインターネットの時代に変貌しました。政治や軍事の面では、1989 年頃に、社会主義と資本主義の壁がいったんなくなって、人やカネや情報の動きが国や体制の壁を突き抜けるグローバリゼーションの時代がやってきます。近代社会の歴史的コンテキストとしては、いまこの第三の「時代」の真っただ中に私たちはいるのだと思います。ここまではたぶんきわめて常識的な話だと

思いますが、ここではいま概観した「時代」のコンテキストを二つの面にわけて考えておきたいと思います。

「日本型資本主義」の時代

加茂）　一つは、「日本型資本主義」の時代という面です。1972年のニクソンショック、73年の第1次石油ショックとその後の世界同時不況によって、インフレ率と失業率のトレードオフをうまく操っているかぎり、資本主義は安定を保つことができるというケインズ主義的な考え方が成り立たなくなり、インフレ率と失業率がともに上昇する「スタグフレーション」が起こり、先進国経済は苦境に陥りました。

ところが、こうした変化には国によってバリエーションがありました。特に日本は一時世界的な注目を集めました。先進国がみな低成長や財政赤字に陥っていたなかで、日本は4%程度の成長率を維持した。その理由は戦後に形成された独特の資本主義システムにあったと言われました。企業は、終身雇用、年功賃金、系列取引、株式持ち合い、小集団労働や職務転換などによって労働を企業に一体化させ、競争を緩和し、長時間労働によって収益を上げることで高い経済パフォーマンスを上げる。政府は護送船団方式と言われる市場調整・企業補助政策で、貿易黒字を増やし資本収益率を高める。こういう政官財協調の資本主義が「日本型資本主義」と呼ばれ、同じ資本主義でも欧米型の資本主義とは異質のシステムだと言われました。資本主義の多様化・異種化が注目されはじめ、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』（エズラ・ヴォーゲル）というような本まで出て、ビジネスマンや官僚が日本の成功に自負心をくすぐられた。「日本型資本主義の時代」が現出したとも言えるかもしれません。

「日本型資本主義」については、国を越えた議論が起こり、これを優れたシステムと考えるか、公正で自由な市場原則から外れた「異質」なシステム、

世界経済の攪乱要因と考えるかが争われました。日本の政財官界は、第二臨調を筆頭に、日本型システムが欧米型資本主義に勝るパフォーマンスを持つようになったと自負してこのシステムを国際化しようとしました。欧米の方にも日本型システムから学ぼうとする動きが生まれ、留学生もたくさんやってきました。これに対して、アメリカの商務省や通商代表部などは、日本型資本主義は市場原則から外れた、異質で不公正なシステムであり是正されるべきものだと主張しました。貿易赤字やベトナム戦争の戦費の増大で国際収支が悪化し、超大国の座が揺らぎ始めていたことがその背景にあったことは周知のとおりです。アメリカは国を挙げて日本の非市場的で不公正な経済制度や慣行を「ジャパン・プロブレム」と呼んで、その修正を求めた。結局 89 ～ 90 年に日米構造協議が行われて、日本は多くの妥協を強いられました。やがて「日本型資本主義」は国内からも改革を迫られることになりました。80 年代日本の経済パフォーマンスは、貿易黒字額などを見ても確かにナンバーワンに見えたのですが、一人勝ちで蓄積した膨大な貿易黒字の再投資先がなく、膨れ上がったマネーは株や債券、不動産、海外資産などに投じられた。そのため、不動産や証券は値上がりしたのですが、それは投機的値上がりで、実体とはかけ離れていました。文字通り「バブル」（泡）だったわけです。カネ余りのために、贅沢、浪費、汚職が横行し、ヤミ手当、官官接待、カラ出張などが当たり前のようになって、日本人全体が知らず知らずこの浮足立った時代の風潮に巻き込まれました。住友財閥の家訓に「浮利に奔らず」という言葉があるそうですが、あの時代はみんなが「浮利」に走ってしまったのです。その浮利が、政界・官界にもバラまかれ、リクルート事件のように二人の現職の事務次官まで巻き込まれる汚職事件が起こったのです。まさに日本中が「バブル」に酔ったのですが、やがて 90 年代になってバブル化した証券や不動産の暴落が起こり、金融機関が保有していた資産が不良資産と化し、そのツケは証券会社や金融機関の連鎖的な破綻をもたらすことになり、この結果、金融機関の大規模な再編成が起こりました。「日本型資本主義」が

作り出した富の多くが泡と消えたと言えます。「失われた10年」ともいわれた平成不況が、20年、30年と続き、「日本型資本主義」そのものがそのまま存続することが難しくなっていったというほかありません。

1993年、自民党一党支配が打破され、政治改革を掲げた細川政権が登場して小選挙区比例代表並立制が導入されました。ついで96年には自社さの橋本政権が登場して、橋本六大改革、七大改革が掲げられました。その後小泉内閣に至る各政権に引き継がれていったこの改革によって、それまでの日本型システムの修正・転換が引き起こされました。多くの制度・法令の作定や改正が行われました。その行き着いた先が、ことの良し悪しは別にして、「政治主導」の名による官邸主導型首相政治だったということかと思います。

この時期、とくに90年代には「日本型システム」をめぐる議論が国際的な広がりを持って行われました。ミシェル・アルベールの『資本主義対資本主義』やマイケル・ピオーリ、チャールズ・セイベルの『第二の産業分水嶺』のように、英米型資本主義と日本・ドイツ型資本主義を比較し、資本主義を差異化･相対化する考え方が有力になりました。私のアメリカ人の友人にも、私にホストを頼んで学術振興会の招聘研究者として大阪市大で「日本型システム」の調査研究をした人もいます。フィンランドやデンマークで講演したときにも、日本型システムに興味をもって結構たくさんの研究者やジャーナリストが聞きにきてくれました。私自身は新自由主義にも日本型システムにも与しない見方でしたので、自ら「折衷主義」と称して通しましたが、こういう議論は現在どこにいってしまったのかと思わざるをえません。

長期停滞経済の時代

加茂）　風呂敷の広げついでにもう一回り大きな風呂敷である「時代」の話として、「20世紀」という時代のことを話させていただきます。考えてみれば、われわれが生きた20世紀という時代は、人類史における空前絶後の高

みの時代だったのかもしれません。世界人口は、この1世紀で15億から60億へ、一気に4倍化しました。ところが20世紀の終わり頃から、先進国は少子高齢社会とか人口減少社会とか言われる状態になっていきます。経済成長率も20世紀に入ってかつてない上昇を示しましたが、1970年代以降急速に低下し、成長時代の入り口の水準まで落ち込んでいます。アメリカの元財務次官ローレンス・サマーズが2013年にIMF総会で、アメリカは収益性のある産業がなくなり、長期にわたる経済停滞に陥ったのではないかという長期停滞資本主義論を打ち出しました。20世紀のような経済成長はもう2度と起こらないというわけです。実際に日本経済もいまや、ゼロ成長、マイナス金利の時代に入っており、投資しても収益の上がる経済活動がなく、低成長が続いています。これは言い換えれば、投資をして利潤を得る。利潤を得るために投資をするという、資本主義のメカニズムが働かなくなっていることを意味するので、だとすれば、水野和夫さんがいうように資本主義は「終焉」したのかもしれません（水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社など）。

拡大・成長のない「定常」の時代が始まったんだという見方をとる人もいます（広井良典『ポスト資本主義』岩波新書）。いずれにしても、人類史における20世紀は、空前絶後の拡大・成長・高みの時代であったが、現在その「時代」が終わろうとしているのだということになります。

見方を変えれば、資本主義はその本来の姿に戻っているのだと言えるかもしれません。経済の成長・拡大という面から見れば、20世紀はピークで、所得分配から見ても平等性が高い時代でした。ところが、20世紀の終わり頃から成長・拡大が止まるとともに、次第に貧富の格差・不平等が広がって、19世紀の古典的資本主義並みの不平等な社会になっていると言われます。「ゼロ・サム」あるいは「マイナス・サム」経済の下で、少ない「サム」の取り合いになっているとも言えます。アメリカの元労働長官ロバート・ライシュは、米国の上位400人の所得が下層半分の層1億5,000万人の合計所得より

も多くなっていると言っています(ライシュ『格差と民主主義』)。グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾンというICT関連の巨大企業(GAFAというそうです)のCEOや高級ホワイトカラーは、かつての富豪たちをはるかにしのぐ億万長者になっているようです。このように不平等や階級対立という面からみると資本主義は終焉するどころか、ますます資本主義らしくなっているというべきかもしれません。長期停滞論が言うように、投資をして利潤を得るという資本主義の基本的なメカニズムが、マネー市場以外では成り立たなくなっているのは、人々の所得と消費があまりにも少なくなっているからだとも考えられます。シスモンディの「過少消費説」が言ったように、人々が貧しく消費が少ないと資本主義は成り立たないのかもしれません。かつての過少消費・資本主義否定論と今日の長期停滞経済・資本主義終焉論とが重なり合っているのかもしれません。

とにかく、資本主義は社会的不平等、階級社会という点では、古典的な資本主義に逆戻りしているように見えます。そのため、超高額所得者、エリートにたいする「人民」、「普通の人々」の不満、敵対心を表現するさまざまな「ポピュリズム」が、世界的な規模で広がっている。多くのポピュリズム論者が言うように、21世紀はポピュリズムの世紀になるのかもしれません。このポピュリズムには、GAFAエリートなどを批判し、より平等な社会を求めるデモクラティックな思考・感情と、移民を排斥したり、コロナのような難問を果断に解決してくれるようなリーダーを求めたりする考え方が混在しているとも言われます。これは、多くの人が感じ危惧していることです。ポピュリズムは、人種差別主義やナショナリズムを強めさせかねません。やはり、われわれはちょっと怖い時代を生きているのだと思います。これも私だけではなく多くの人々が現在持っている「時代」感覚ではないでしょうか。

コロナの時代

加茂） 2020年2月、このような「時代」感覚に捉われているうちに、私の立命館大学での非常勤講師の仕事が終わりました。仕事がなくなったその時期がちょうど新型コロナウィルス感染症が蔓延し始めた時期でもありました。基礎疾患をいくつももった年寄りなので、ステイ・ホーム、ソーシャル・ディスタンスは厳に心掛けましたが、おかげでソーシャル・ディスコミュニケーションに陥り、頭から言葉が出てきにくくなり、会話もうまくできなくなりました。稲継さんたちがオンライン飲み会に誘ってくれ、こんなミーティングもあるのだと気が付きましたが、まだなかなかうまく使いこなせません。

これからどうしようか、いろいろ考えてはいますが、なかなか見えてきません。2年前から大阪市大時代の学部や大学院のゼミ生に声をかけて、研究会、読書会をやったりしていましたが、それもコロナで中断しました。徳久さんたちとは科研の共同研究をやっており、このオーラル・ヒストリーはその一環として企画してもらいました。学部ゼミの卒業生も私の病気以来、何組かに分かれて毎年京都に集まってくれています。こうしたつながりのなかで、できる限り前向きな余生を送りたいと思っているのですが、なにしろコロナのおかげで2、3年先の見通しがつきません。20世紀には、あっちへ行ったりこっちへ来たり、彷徨いながら生きてきましたが、その都度の行き先は見えていたように思います。ところが、現在は次の目標地点が見えないまま、進みも退きもならない状態に置かれている感じがします。

蛇足をもう一つ重ねます。人類の歴史が感染症との闘いの歴史であったこと、中世にはヨーロッパの人口が疫病（ペスト）のために、4分の1も減ったことがあったらしいことは知識としては頭の中にありましたが、そんなことが自分の人生に関わってこようとは思いもしませんでした。ペストについてはアルベール・カミユやダニエル・デフォーの本がありますが、この間に

私はデフォーの本を読んでみました。『ロビンソン・クルーソー』の著者であるデフォーは17世紀後半、ちょうどピューリタン革命と名誉革命の間の時期にロンドンで起こったペストのことを調べ、カミユのようにそれを哲学的な問題として考えるのではなく、起こった事実を当時の資料に基づいてレポートしています。教区（パリッシュ）ごとの人口の変化を見るのですが、感染者が出た教区では週ごとにみるみるうちに病人・死人が増えていく。対応策はただ「隔離」しかなかったのですね。金持ちは一家をあげて田舎へ逃げるのですが、デフォーはロンドンにとどまって観察をする。病人が出た教区には監視人が立てられて、人の出入りを禁じる。ロックダウンというわけですが、監視人に賄賂をやって出入りする人もいたらしく、穴だらけのロックダウンだったのでしょう。人々は波状的にやってくる疫病の恐怖におびえながら運よく生き残れることを祈るわけです。ヨーロッパではこんな時代が千年も続いたのですね。「運命」（フォルツナ）という人知をもってはいかんともしがたい力に翻弄されるので、だからキリスト教から占いの類まで、現世での幸運ないし、せめて死後の救いを祈る信仰が生まれたのでしょう。19世紀になって北里柴三郎らがペスト菌を発見して、ワクチンがつくられるまで、人々は疫病にたいしてはただ祈るしかなかったのだと思います。デフォーの本を読んでいると、身の毛がよだちます。感染症学の発達で、ウイルスや細菌が感染症を引き起こすことはわかってくるのですが、新しい細菌やウイルスが発見されても、その遺伝子情報などが解明されるまでは、治療薬もワクチンもつくれない。いま私たちはそういう時期にいるということでしょう。私が生きている間にワクチンができるかどうかわからないと考えると、余生の見通しを簡単には語れそうもありません。類としての人間が、災いに対する集団免疫・抗体を持ち、「何が起こるかわからない時代」を乗り越えていく知恵を持っていることを信じたいものです。

というわけで、私のオーラル・ヒストリーも、唐突ではありますが、この辺で幕を引かせていただきます。ブランクだらけの話で失礼しました。

加藤） 加茂先生には詳しいレジュメをご用意いただき、3日間にわたってお話をいただきました。誠にありがとうございました。最後のお話も含めて、全体に関して質疑応答をしたいと思います。

先生の研究者としての人生と、社会という観点での時代の移り変わりをからめてお話しいただいたのですが、社会が変わり、資本主義もこれまでと違う局面に入るかもしれない。そういう時代における「政治学」の役割、「政治学」に対して加茂先生が期待することがあれば、教えていただければと思います。

加茂） 「包容」ですかね。感染症で人類が絶滅することはないでしょうが、多くの人が生き残っていくためには「集合的な抗体」を持つよりしょうがないらしい。感染症学、遺伝子学などの発展によって、何とか人類が共有することのできる免疫、抗体を発見する、そのためにどれだけ協力しあえるかが問われていますね。一方で「排除」の政治が世界中に出てきているので、それに対する説得力のある言説を、どれだけ「政治学」が出していけるかということが大事なのではないかと、とりあえず思っています。

新川） 「日本型システム」については、私も同じような問題意識をもってきたのですが、このシステムが機能しなくなってきたのか、維持されているのか、機能しなくなったのだとすれば、それは内在的な原因なのか、外在的な環境要因なのか。それが1点。もう一つは日本における政治改革が「政治主導」ではなく「官邸主導」になってしまったわけですが、とりあえず政治改革が、今の時点で成功したと言えるのかどうか。アンビバレントだとは思いますけど。評価が、どちらに傾いているか。3つ目は「ポピュリズム」について。最近、ヨーロッパで使われている言葉で「ポピュリスト・ナショナリズム」というのがある。僕は、自分では「ナショナル・ポピュリズム」と呼んでいたんですけど、ポピュリズムは、基本的に国内的に敵と味方をつくる。エスタブリッシュメントに対する「われわれ」をつくりあげるのがポピュリズム。アメリカにおける「ポピュリスト・パーティ」がそうだった。ところ

が今のヨーロッパの「ポピュリズム」を見ると「反エスタブリッシュメント」だけど、彼らが支持を受けたのは「移民排斥」によってですよね。どこもそうです。フランスにしろ、オーストリアにしろ、スウェーデンにしろ、イギリスにしろ、ドイツも、どこでもポピュリズム政党が伸びるのは、「反 EU」ではなく「反移民」を訴えてからです。これを「ポピュリズム」と言っていいのか。先生はどうお考えでしょうか？

加茂）　うーん、どうでしょうね。まず「日本型システム」のことですが、例えば橋本「七大改革」の中で具体的に実行されたものがあることは間違いないですが、具体的な制度では説明できないものもあって、結局「日本型システム」はもっと捉えどころのないものに帰着したような気がする。

新川）　政治文化のような。

加茂）　例えば、選挙制度が改革され、企業や経済、労働、司法などのシステムも制度は変わったけれども、実体、機能が変わったかというと、首を傾けたくなる。選挙制度の改革は、一方で政権交代があって政党間の競争が働くとともに、勝ち負けをはっきりさせて与党や執政のリーダーシップが働くシステムをという趣旨だったと思うのですが、いつのまにか一強体制で政権交代は起こりにくく、忖度は働くけれどリーダーシップと言えそうなものは働かないシステムになってしまった。民主党の失敗を経て、安倍一強体制と言われる体制ができたけれど、コロナの問題なんか首相が自分の言葉で国民に語れないのでリーダーへの信頼感が出てこない。これは制度で説明のつく問題なのか。一人ひとりの政治家、国民が意思をもって議論して物事が決められる社会になってはいない。そういう意味では「日本型システム」はまだ残っているような気がする。具体的な制度レベルで変えることのできる次元の改革はある程度行われたかもしれないが、深いところに残っているものがあるような気がする。そういう意味では政治文化と言えるかもしれません。文化の隠れたパターン、行動様式は、そう簡単に変わらないのではないかという気がしていますね。

新川）　そこは同感ですが、制度化されたレベル、経済であれば「労使慣行」の変化、政治であれば「中選挙区制」から「小選挙区制」へという制度変更が、果たして積極的な効果を生んでいるのかどうかという点についてはどうでしょうか？例えば、極端な話、小選挙区によってこんなことになるなら、中選挙区のほうが、金はかかっても、まだましだったのではないかという評価もありうるわけですよね。制度改革の効果をどう評価するかということですね。

加茂）　中選挙区制のままでグローバル化時代を迎えたとすれば、日本は悲惨なことになっていたでしょうね。小選挙区と比例代表を併用する改革をすることで、選挙民の政党選択とリーダー選択が選挙結果に表現される仕組みがうまくつくれていたら、文化レベルにまで及ぶ変化が、いくらか起こったかもしれない。1994 年の細川・河野会談あたりに大きな分かれ目があったのではないかという気がします。小選挙区制と比例代表制の併用効果が出る選挙制度改革が行われておれば、もう少し政党間競争に迫力が出て、リーダーシップのある政治家が出てきて、民主党が失敗してもまた巻き返していける程度の復元力は残せたのではないかという気がして、モヤモヤしてきたんですが。

新川）　民主党政権から、まだ 11 年でしょう。イギリスは労働党がブレアの下で政権奪還するまで、17 年かかった。

加茂）　もう一つの野党の固まりの方に、ある程度求心力が働くようにならないと。

新川）　政治の言葉に力がないですね、口先だけしか聞こえない。

　現在の「ポピュリズム」は「排外的なナショナリズム」ではないのではないかという問題はいかがでしょうか？

加茂）　ポピュリズムは、「右翼ポピュリズム」「左翼ポピュリズム」「ナショナル・ポピュリズム」とか、いろんなものが混じり合っていて、なにかのメルクマールでスパッと切ることができにくい、錯綜した現象になっているの

ではないか。

新川)　明らかに「反移民」で支持を集めている。ルペンだって停滞していたのが、90年代にイスラムのスカーフ問題が起きてから注目を集めている。現在、スウェーデンは「福祉ナショナリズム」で、移民に対する寛大な受給はけしからんと。これを「ポピュリズム」と見るのか。既得権益に挑戦するのが本来の「ポピュリズム」で、異質な者を排除するというのは狭隘なナショナリズムでは？

加茂)　岡沢憲芙さんの報告を聞いたことがあるけど、彼がスウェーデン研究をやっていた頃は、スウェーデンの国籍をもっている人と婚約した人間が婚約者と会うためにスウェーデンに行く旅費を国費から出してくれるくらい包容的であったと聞きましたが。

新川)　それは良きスウェーデンの時代ですかね。他方においてずっと優生思想が強かった。

徳久)「日本型システム」の特徴を、日本特有のものの考え方、文化、言うなれば「古層」に求める点、面白く伺いました。実証性の問題から「政治文化」を限定的に捉えられる風潮が強い昨今ですが、直感的には、日本特有の思考法や対人関係の築き方などは、われわれの生活習慣や行動様式に刷り込まれているように思います。その一方で、一部断絶しているものもあるのではないでしょうか。森嶋通夫さんは晩年､そういう話を書かれていますよね。日本が没落していく原因は何か。それは、戦前の国家主義的、儒教的な思考パターンや行動様式が戦後に変わっていったことにあるのではないか。変化の象徴として森嶋さんが取り上げるのは政治家です。彼は政治家の変質を問題視し、日本の復権には政治家の活用が必要だとエッセイに書かれていたことを記憶しているのですが、先生のお話はそれと似たところが少しあるなと感じました。今の日本を見た場合、何が停滞しているのか、停滞感は何か、先生のお考えはいかがでしょうか？

加茂)　一強型の官邸政治に日本型の特徴が表われていて、それに対する警

戒感をもっていたんですが、今やせっかく「一強」なのにグズグスしてコロナに対して何もしないことに対するいら立ちの方が強くなっている面がありますね。

新川）　政府が何もしないわりに、国民は自分たちで気を付けてやってますね。アメリカみたいに「俺たちは自由だ」と主体的に動いたらコロナはどうなるか。「主体」という言葉をはき違えてはいますが。

田口冨久治先生が「マルクス主義政治学」を打ち立てようとした時、先生は「近代政治学」を内側からみようとした。マルクスとパーソンズは確かにグランドセオリーではありますけど、思考様式は違う。価値観の対立、思想的な対立が先生のなかであったのかどうか。マルクスとパーソンズのギャップについてどんな感じ方をされたのか。具体的なものに入っていくとともにパーソンズ的な一般図式とか、「無知のベール」というものから演繹的に「正義論」を展開する「純粋理論」の思考への結びつき、マルクス主義の「一般理論」「抽象理論」のところを、もう一度お聞きしたいなと思います。

加藤）　私も気になっているところで、ぜひお願いします。

加茂）　僕には基本的には抽象的な思考で通していくだけの粘着力がないんです。パーソンズ以上にロールズも、あんな抽象の世界だけよく一冊本を書けたなと思うくらい何も具体が出てこない。時務的・経験的な問題を捉えて議論をする理論になっていないところがあって、そういう点では苦手です。ただロールズについて言えば、効用曲線を描いて、ミニマックス原理ですか。自由にやりたい、得をしたいという考え方と、でも自由の結果として自分が惨めな目に合うのはいやだという気持ちが誰にもあって、その両方をうまくつなぐ論理があれば、それが大多数の人々の正義の感覚に適合するのではないかというのが、彼の考え方だと思うんですが、それは何の証拠もないけど、論理的に納得がいく感じがして、その意味でロールズは面白いなと。

パーソンズは社会行為をエレメンタルな概念にしながら、マルクスの言葉で言えば上向していくことになるんですが、要所、要所で「この理屈を使っ

て、こういう具体的な問題が解ける」という議論をしている。ファシズム論もそうです。それでパーソンズにかなり傾倒した面があります。マルクス主義のことですが、田口先生はストレートというか一本気な論理なんですが、僕はものごとを屈折した目で見るような役割を演じたいと思って、例の『政治の科学』でも、アメリカの政治学を内側から見て批判するような書き方をした。それは田口さんとはちょっと違ったアプローチのような気がしますね。

加藤） 3日間のお話をうかがって、加茂先生の着眼点の鋭さや、注目するトピックが時代の先を行っているという印象を強く持ちました。「世界都市」もそうですし、助手論文のテーマとして政治システム論を選んだとか、着眼点がどれも鋭いなと感じます。先生が、自らの研究を振り返って、これらに関して言語化できることがあれば、お教えください。

加茂） 理論的な先見性に基づいて「こういう仮説をもって何か探す」ということではなく、なんかみんなより先に気が付いたぞと言えることを探しているという、さもしい発想だと思いますね。

加藤） お話を伺っていて加茂先生の一貫しているところは経験を大事にされていることが軸かなと感じました。例えば、「歴史性や文脈性の重視」、「そこに生きる人びとの主体性の重視」などです。同時に、メインストリームに対する一定の距離感や批判的思考が、加茂先生には一貫されているような気がします。このような思考様式やものの見方がどのご研究にも反映されている感じがしました。

加茂） 一時、リージョナリズムが、あちこちにできていって、それがグローバルなつながりをもつようになるかもしれないとどこかで考えていましたけど、アメリカ、中国、ソ連といった大国が力を持っている間は簡単に成立しないのですね。いま世界中で「排除ウイルス」が蔓延しているんだけれども、人類の集団免疫としてゆるやかな「包摂型グローバリズム」ができないかとは思っています。

加藤）「政治学」が今の状況で何を戦略として考えていくべきか、加茂先生のお答えは「包括を可能にする政治的、批判的な言説」を組み立てていくことが求められているのではないかということでした。加茂先生の長い研究者人生のなかで蓄積されたこと、これからの「批判的言説」を考える際の手がかり、ヒントになりそうなものがあれば教えていただければと思います。

加茂） 最近、新しい学問的業績をフォローしていないので出てきにくいのですが。例えば､待鳥聡史さんの『政治改革再考－変貌を遂げた国家の軌跡』(新潮選書)なんかは面白かったな。20 世紀末から 21 世紀にかけてのさまざまな改革の時期を大きな網をかけて再検討した本として読みました。別に批判的な言説ではないかもしれないけど、僕流に言えば、この時代の「コンテキスト」を見ようとしたこと自体が問題提起的なんじゃないかと思います。この時代に大きな変化を日本はした。トータルでその意味はよくわからないけど、そのことに気付かせてくれた本です。対抗的言説とは言えなくても、大きな網をかけて時代を見られる人が出てくれれば、政治学から発見が出てくる可能性はあるんじゃないかという気がしているんですけどね。

徳久） 今後の企画ですが、加藤さんが「ぜひ待鳥さんのお話を伺いたい」と。この研究会にお呼びして一つのテーマを設定して議論してもいいなと考えています。

加茂） いま「政治改革の時代再考」をテーマに掲げられる人物は、そうはいないだろうなという気がしているので、その点では感心したんですけど。

徳久） 新川先生のご質問の中に､「日本型システム」はまだ残っているのか、変質しているのか、改革の時代に、それはどのように影響するのか、という問いかけがありました。加茂先生はそれに応答されましたが、最後に「わからないんだよね」とおっしゃられた点をもう一度伺いたいと思います。「グローバル化していく時代の中での地方自治のあり方」をどのように見通されていますか？人口減少により、外国人労働者の流入が増える一方で、多くの自治体は人口の社会減に悩み、共働きも増えることで地域社会の担い手が減

少傾向にある状況に鑑みれば、地域社会のあり方は変容せざるを得ないように思います。先生は地方自治のこれからのあり方をどのようにお考えですか？

加茂）　総務省とか地方制度調査会も、まだ十分議論していないと思いますが、結論的にいえば、「多次元多層システム」ということにしないと社会から公的部門に寄せられる要請に応えられない。しかし、ミルフィーユみたいなガバナンス・システムをつくったら資源がいる、お金がいる、人がいることになるわけで、人口減少社会のなかで、公的なサービスの供給主体、自治の主体をどう創出していけるかが世界共通のテーマになっていくのではないかと思いますが、そこにディジタル・ネットワークとか、AI が絡み合ってきます。ディジタル化、AI 化が進みすぎると、GAFA 支配の超格差社会になってしまいかねないわけですから、労働時間短縮やヒューマン・サービスの確保で格差社会を緩和していく政策や運動が必要になってくると思います。

徳久）　ガバナンスについてですが、総務省や地制調は「コミュニティ」への期待を堅持しています。そこでの議論は、町内会・自治会といった昔ながらの地縁組織の動員を前提にしています。ところが、現実には、動員対象の地縁組織の担い手は高齢化し、後続を欠くことで担い手不足問題が深刻化している。状況を変えるには、これまで無償ボランティアが提供した公共サービスを有償化するなどして、地域で人々が働く仕組みを補完させる必要がある。1990 年代以降、地方公務員の削減を重ねてきた日本では、なおさらに地域人材の活用を新たに行なう必要がある。このように考えるのは、人口減少地域に調査で入るたびに、地域の公共サービスを持続させるには、住民と市区町村の間にいくつかのクッションを入れないともたないだろうと痛感させられるからです。しかし残念なことに、新たな制度設計の話は、総務省や地制調の議論では正面から行われず、今なお、効率化の観点から議論が進められています。効率や集約という発想からの転換なしに、人口減少社会への

実質的な対応は難しいと考えるのですが、先生はどのように思われますか？

加茂）　本来ならば、そういうことを調べるためには地域をまわって、何が起こっているかを探していく研究ができたらと思うんですが、それを僕はできない。そもそも「地域を回る」ということも今は難しい。でも最近気づいたのですが、京都の風物詩ともいえる地蔵盆なんて今年はほとんどの街ではできなかったのですが、私の住む町のあたりで若いお父さん、お母さんが子どもたちと一緒に工夫してやったらしい。またうちの近所はライブハウスもいくつもあるんですが、コロナでやれなくなったライブハウスで、オーナーたちがパフォーマーと協力して音楽の灯をともし続けていこうと活動しているらしい。これは集約化やディジタル・ネットワークではなくヒューマン・パワーですね。そういう動きが身近なところに見える。徳久さんの言う「クッション」が意外に足元に「再発見」できるかもしれない、と思いました。

新川・徳久・加藤）　加茂先生、貴重なお話ありがとうございました。長時間、お疲れさまでした。

加茂）　ありがとうございました。

（2020 年 8 月 11 日、12 日、25 日に、立命館大学朱雀キャンパスで実施）

＊1　本稿は、科学研究費補助金（課題番号：19K01464）の研究成果の一部である。

補記　加茂利男(かも・としお)先生　略歴

1945年1月　和歌山県　生まれ

1　学歴・職歴

1967年3月　大阪市立大学法学部卒業
1967年4月　同助手（1972年3月まで）
1972年4月　同助教授（1985年3月まで）
1985年4月　同教授（2007年3月まで）
（この間、大阪市立大学法学部長、大阪市立大学文化交流センター所長、大阪市立大学都市研究プラザ所長などを歴任。退職後に、大阪市立大学名誉教授）
2007年4月　立命館大学公務研究科教授（2015年3月まで）
2015年4月　立命館大学公務研究科などの非常勤講師(2020年3月まで)
2020年4月　立命館大学衣笠総合研究機構プロジェクト研究員

現在　大阪市立大学名誉教授、立命館大学衣笠総合研究機構プロジェクト研究員、大阪市立大学都市研究プラザ名誉研究員。

2　主要業績

①単著

『現代政治の思想像－現代政治学批判序説－』　(日本評論社, 1975年)
『アメリカ二都物語－21世紀への旅－』　(青木書店, 1983年)
『都市の政治学』　(自治体研究社, 1988年)
『二つの世紀のはざまで－国境を超える体制改革－』
(自治体研究社, 1990年)
『日本型政治システム－集権構造と分権改革－』　(有斐閣, 1993年)

『市町村合併と地方自治の未来－「構造改革」の時代のなかで－』
（自治体研究社，2001 年）
『地方自治･未来への選択－平成市町村合併と「地方構造改革」のなかで－』
（自治体研究社, 2002 年）
『新しい地方自治制度の設計－「規模の利益」か「小さい自治の連合」か－』
（自治体研究社, 2005 年）
『世界都市－「都市再生」の時代の中で－』（有斐閣, 2005 年）
『地方自治の再発見－不安と混迷の時代に－』（自治体研究社　2017 年）

②共著

（田口富久治・佐々木一郎）
『政治の科学－現代的課題と方法－』
（あゆみ出版社, 1972 年／青木書店, 1974 年／
青木書店, 改訂新版, 1979 年）
（遠藤宏一）
『地方分権の検証』（自治体研究社, 1995 年）
（大西仁・石田徹・伊藤恭彦）
『現代政治学』（有斐閣, 1998 年／有斐閣, 新版, 2003 年／
有斐閣, 第 3 版, 2007 年／有斐閣, 第 4 版, 2012 年）
（白藤博行・山田公平）
『地方自治制度改革論－自治体再編と自治権保障－』
（自治体研究社, 2004 年）
（中村剛治郎・高原一隆・佐無田光・榊原雄一郎・鈴木誠・岡田知弘・
多田憲一郎・鎌倉健・鈴木茂・安東誠一）
『基本ケースで学ぶ地域経済学』（有斐閣, 2008 年）
（鶴田廣巳・角田英昭・岡田知弘）
『幻想の道州制－道州制は地方分権改革か－』（自治体研究社, 2009 年）

(永井史男・稲継裕昭)

『自治体間連携の国際比較－市町村合併を超えて－』

(ミネルヴァ書房, 2010 年)

(加藤幸雄・榊原秀訓・柏原誠)

『地方議会再生－名古屋・大阪・阿久根から－』

(自治体研究社, 2011 年)

③編著

『「構造改革」と自治体再編－平成の大合併・地方自治のゆくえ－』

(自治体研究社, 2003 年)

『資料と解説　自治体自立計画の実際－「三位一体の改革」と町村－』

(自治体研究社, 2004 年)

『日本型地方自治改革と道州制』　(自治体研究社, 2007 年)

④共編著

(自治体問題研究所)

『地域づくり運動・新時代』　(自治体研究社, 1984 年)

(遠州尋美)

『東南アジア－サステナブル世界への挑戦－』　(有斐閣, 1998 年)

(白藤博行・山田公平)

『地方自治制度改革論－自治体再編と自治権保障－』

(自治体研究社, 2004 年)

(徳久恭子)

『縮小都市の政治学』　(岩波書店, 2017 年)

⑤論文およびその他など（特に、本文中で言及があったものや、個人史に関係するもの）

「システム史観の形成とその問題性（上・中・下）」『法学雑誌』16 巻 2 ～ 4 号・17 巻 1・2 号（1970 年）

「二十世紀デモクラシーの思想的位相－タルコット・パースンズのファシズム論を手掛りとして－」日本政治學會編『年報政治学 1973　危機の政治理論』（1973 年）

「コンビナートと都市政治」宮本憲一編『講座地域開発と自治体 1 大都市とコンビナート・大阪』（筑摩書房, 1977 年）

「現代アメリカの保守主義－「保守化の時代」の思想構造をめぐって－」山崎時彦編『政治思想史―保守主義の生成と発展』（昭和堂, 1982 年）

「転換期の世界都市－ 20 世紀末のニューヨーク大都市圏と都市の未来像－」柴田徳衛編『21 世紀への大都市像－現状と課題－』（東京大学出版会, 1986 年）

『関一日記－大正・昭和初期の大阪市政－』（関一研究会の一員として編集に参加）（東京大学出版会 , 1986 年）

「関一の都市改革思想と公共部門論（上・下）」『住民と自治』273・274 号（1986 年）

「「都市自由主義」の時代－ 20 世紀ニューヨーク市政論－」大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市 4 ニューヨーク』（大阪市立大学経済研究所, 1987 年）

「補助金と政治・行政－都道府県関係者へのアンケート調査から－」（水口憲人と共著）宮本憲一編『補助金の政治経済学』（朝日新聞社, 1990 年）

“Urban Regional Governance in the Age of Globalization: The Case of Metropolitan Osaka,” in John Friedmann ed., *Urban and regional governance in the Asia Pacific*, University of British Columbia Press, 1999.

“An Aftermath of Globalization? : East Asian Economic Turmoil and Japanese Cities Adrift”, *Urban Studies*, 37 (12) , 2145-2165, 2000.

“Examining Japanese City-Regions in the Light of Asian Economic Crisis”, *Asian Geographer*, 19 (1-2), 21-36, 2000.

「政治学と都市研究・断簡」『法学雑誌』54 巻 4 号（2008 年）（大阪市立大学における退職記念講演を文字起こししたもの）

「地方自治と私」日本地方自治学会編『変革の中の地方自治』（敬文堂, 2011 年）（2008 年の日本地方自治学会における講演を文字おこししたもの）

※上記以外にも、英語論文も含め、学術論文多数。

3　学会活動・社会活動

日本政治学会理事長（2002 ～ 2004 年）および理事、日本地方自治学会理事長（2000 ～ 2002 年）および理事、自治体問題研究所理事長（1998 ～ 2006 年）および理事、日本公共政策学会理事、日本比較政治学会理事、きしわだ都市政策研究所理事長などを歴任。